

『ナナメウシロのカムパネルラ』 成井豊

登場人物

花巻みねり(インストラクター39)

小山田登(編集者37)

小山田優(登の弟33)／成島雄太(演出家)

小山田澄子(登の祖母88)／タケチ(高校生)

宮守弓奈(登の同僚33)／クサカベ(高校生)

岩根麻衣子(登の上司43)／あきの(みねりの姉39)

上郷敏行(ゆかりの義兄52)

上郷龍平(ゆかりの甥、大学1年22)／ヤマノウエ(時間管理局員)

上郷穂香(ゆかりの姪、高校3年18)／オオツ(高校生)

平倉誠二郎(作家39)

二〇二五年八月一七日夕、東京都新宿区西新宿のマンションの平倉誠二郎の自宅。誠二郎に案内されて、八人の客（花巻みねり・小山田優・小山田澄子・岩根麻衣子・宮守弓奈・上郷敏行・上郷龍平・上郷穂香）が入ってくる。それぞれが椅子やソファに座る。

誠二郎　えー、お声がけした皆さんが全員揃ったようですので、そろそろ始めたいと思います。本日はお忙しい中、足をお運びくださいます。誠にありがとうございます。

ざいます。今日初めてお会いする方もいらっしゃるので、改めてご挨拶させていただきます。作家の平倉誠二郎です。よろしく願います。

誠二郎が礼をする。麻衣子が拍手する。つられて、他の七人も拍手する。

誠二郎　ためらいがちな拍手、ありがとうございます。ちなみに、僕の本を読んだことがあるという方は？

みねり・麻衣子が手を挙げる。

麻衣子　（周囲を見回して）え？嘘、私と花巻さんだけ？そんなはずないでしょ。宮

守さんも読んでもるよね？

弓奈 もちろんです。でも、私たちは本を出す側の人間だから。

麻衣子 それはそうだけど、他社から出た本は、私たちだって読む側でしょ？（誠二郎に）私は平倉さんの本は全部読んでます。小説もエッセイ集も対談も。

弓奈 （手を挙げて）私もです。

誠二郎 ありがとうございます。（他の五人に）他は皆さん、ゼロですか。予想はしてたけど、寂しいです。

麻衣子 信じられない。（他の五人に）平倉さんの小説は、毎年、本屋大賞にノミネートされてるんですよ。あと、直木賞で一回、山本賞でも一回、ノミネートされてます。

穂香 受賞はしてないんですか？

麻衣子 ノミネートされるだけでも名誉なことなんです。

誠二郎 まあまあ。僕が言っても負け惜しみに聞こえるかもしれないけど、作家の価値はどれだけ賞を獲ったかじゃありません。

弓奈 そうですよ。平倉さんの小説はたくさんの人に読まれてるし、テレビドラマになったものもあります。

優 俺、見てましたよ。『嵐になるまで待っててね』（澄子に）ばあちゃんも見てたよな？

澄子 あれはイマイチだったね。

優 そうか？俺は結構楽しめたけど。

穂香 でも、視聴率がひどくて、八話で打ち切りになりましたよ。

敏行 穂香、余計なこととは言わなくていい。

穂香 私は事実を言っただけ。実際、ネットの評判も最悪だったし。

敏行 穂香。

誠二郎

えー、自己紹介から始めて、雰囲気のを和らげるつもりだったんですが、かえってギスギスしてしまいましたね。僕の作戦ミスです。ごめんなさい。では、気を取り直して、話を本題に戻します。今日、皆さんにお集まりいただいたのは、事前にお知らせした通り、僕がこれから書くこうと思っている新作についてです。

優

兄のことを書くんですね？

誠二郎

そうです。あなたのお兄さんの、小山田登くんが主人公です。僕が彼と初めて会ったのは今から十二年前。僕が作家としてデビューしてすぐでした。が、僕が書きたいのは彼の人生のほんの一部。事故の後の四日間です。

弓奈

(他の五人に) 具体的には、先週の月曜から木曜までです。

誠二郎

(他の五人に) 紹介が遅くなりましたが、こちらは徳丸書店の宮守さん。今度の新作の編集を担当していただくことになってます。

弓奈

(他の五人に) 宮守弓奈です。よろしくお願いします。

麻衣子

(他の五人に) 宮守が所属する文芸部で部長を務めております、岩根麻衣子です。十二年前の平倉さんのデビュー作は私が担当しました。

誠二郎

(他の五人に) 岩根さんは僕にとつては恩人と言ってもいい人で、その後もずっとお世話になってきました。で、先日、新作の構想をお話したところ、

敏行

実際に基づいて書くなら、関係者に承諾を取ってからの方がいいとアドバイスされました。で、こうして皆さんにお集まりいただいたわけですよ。

そういうことでしたら、我々のことはどうかお構いなく。小山田さんにはみねりが大変ご迷惑をおかけしましたし、とやかく口出しできる立場じゃありません。

誠二郎

でも、あなたは小説の中に登場するんですよ。

敏行  
は？

誠二郎  
あなたは先週の月曜から木曜の間に、小山田くんに会いましたよね？だから、登場させないわけには行かないんです。

敏行  
ちよつと待ってください。僕は小山田さんには会ってませんよ。

誠二郎  
いいえ、あなたには自覚がないでしょうが、間違いなく会ってます。そうだよね、花巻さん？

みねり  
はい。

敏行  
みねりちゃん、あの話、やっぱり本気だったの？

みねり  
うん。お義兄さんには信じられないだろうけど。

穂香  
私は信じるよ。（龍平に）お兄ちゃんも信じるよね？

龍平  
（頷く）

優  
（みねりに）ちなみに、俺は会ってるんですかね？

みねり  
はい。

優  
ばあちゃんも？

澄子  
私は気付いてたけどね。

優  
嘘つけ。

麻衣子  
（他の五人に）私と宮守も当然会ってます。まあ、花巻さんの話が事実だったとしたら、という前提ですが。

穂香  
私は事実だと思います。花巻さんには嘘をつく理由がないですから。

麻衣子  
嘘じゃなくて、そう思い込んでるだけだったとしたら？

誠二郎  
その可能性がないこともないけど、僕はあくまでも、花巻さんの話を事実として書きます。だって、その方がおもしろいから。

麻衣子  
まあ、小説っていうのはそういうものですよね。

誠二郎

（他の五人に）そういうわけで、僕を含めて、ここにいる九人全員が小山田くんに会ってる。だから、今日、ここに集まっていたんです。皆さんを僕の小説に登場させることを承諾していただくために。

敏行

申し訳ないけど、今すぐは無理です。私には小山田さんと会った記憶がない。だから、何を書かれるか、全く想像がつかない。

誠二郎

その気持ちはよくわかります。おそらく、他の皆さんも同じことを感じていらっしゃるだろうと思います。（他の五人に）そうですね？

五人が頷く。

誠二郎

そこで、口頭で申し訳ないんですが、今から皆さんに新作の構想を説明します。それを聞いた上で、判断していただけないでしょうか。

優

いいですよ。まあ、俺としては、答えは最初からイエスに決まっています。兄貴を主人公にした小説を書いてもらえるんだから、文句なんかない。むしろできる限り協力しますよ。

敏行

みねりちゃんもそれでいいの？

みねり

お義兄さん、違うの。言い出しっぺは私なの。私が最初に平倉くんに話をし、て、そうしたら平倉くんが小説にしたいって言い出して。

穂香

で、みねりさんも賛成したのね？

みねり

（頷いて）あの人のこと、忘れちゃいけないと思ったから。

敏行

わかった。（誠二郎に）じゃ、早速聞かせてください。新作の構想を。

誠二郎

了解しました。

誠二郎がノートを開く。

誠二郎　皆さんご存知の通り、小山田くんの事故が起きたのは先々週の金曜日。時間は夕方の五時過ぎでした。場所は調布市の交差点。花巻さんが横断歩道を渡っている、いきなりと大型トラックが左折してきた。花巻さんはタイヤが軋む音を聞いて、その場に立ち竦んだ。「ぶつかる！」と思った瞬間、後ろから歩いてきた小山田くんが、花巻さんを突き飛ばした。

九人の人々が歩き出す。いつの間にか、みねりの後ろを小山田登が歩いている。みねりが横断歩道を渡る。大型トラックが左折してくる。みねりに衝突する直前、登がみねりを突き飛ばす。みねりが転び、路面に頭を打ち付ける。登は大型トラックに撥ね飛ばされ、路面に叩きつけられる。みねりと登が立ち上がり、再び歩き出す。全員が去る。

## ① 誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 事故の後、花巻さんは救急車で近くの病院に搬送されました。目が覚めたのは、翌日の昼過ぎ。直ちに精密検査が行われましたが、結果は異状ナシ。大事を取って翌日も安静に過ごし、事故から三日後に退院となりました。

八月四日夕、調布市の病院のロビー。みねりがベンチに座っている。足元にバッグ、頭に包帯を巻いている。穂香がやってくる。リュックを背負っている。誠二郎は去る。

穂香 みねりさん。

みねり 穂香ちゃん、来てくれたの？ 予備校は？

穂香 早退した。あ、でも、みねりさんのためじゃないよ。朝から頭痛がひどくて。

みねり また寝不足じゃないの？

穂香 かもね。一応、毎日四時間は寝るようにしてるんだけど。

みねり え？ まだ残ってるの？ 「四当五落」って言葉。

穂香 残ってない、残ってない。睡眠不足は記憶力が低下して勉強の効率が落ちるし、免疫力が低下して風邪を引きやすくなる。でも、私の場合はそうも言っ  
てられなくて。

みねり 模試の結果、良くなかったの？



穂香 上がることは上がったんだけど、期待したほどじゃなくてね。だから、今月

から勉強時間を延ばしたの。

みねり でも、体を壊したら元も子もないじゃない。家に帰ったらすぐに寝なさい。

穂香 あーあ。今日まで入院してた人に体を労わられるなんて、情けない。

敏行がやってくる。

敏行 穂香、おまえも来たのか。

穂香 お見舞い、一度も来られなかったから、最後くらいはと思って。

敏行 予備校、六時までじゃなかったのか？

みねり 頭痛で早退したんだって。

敏行 穂香に）そうなのか？ だったら、真っ直ぐ家に帰ればよかったんだ。おま

えが来ても、何もすることは無い。

穂香 あるよ。（バッグを持ち上げて）荷物持ち。

敏行 それは俺が持つからいい。おまえはさっさと帰れ。

穂香 仰せの通りに。（バッグを敏行に投げて、歩き出す）

敏行 （バッグを受け止めて）おい！ 穂香！

その時、登がやってきたが、敏行の声にビクツと立ち止まる。

みねり （登の方に向かって）すみません。何でもないんです。

登 え？

穂香 お父さん、病院で大声を出さないでよ。

敏行 おまえがバッグを投げるからだろう。

みねり まあまあ、穂香ちゃんもせっかく来てくれたんだし、みんなと一緒に帰りましょう。

敏行 わかった。で、会計は済んだの？

みねり まだ。お義兄さん、申し訳ないけど、立て替えてくれる？明日銀行に行って、下ろしてくるから。

敏行 いいよ、俺が出すよ。結局検査だけだったし、大した額にはならないだろう。でも、お義兄さんにはたくさん迷惑をかけちゃったし。小山田さんのお葬式にも行ってくれたんでしよう？

敏行 ああ。小山田さんはご両親がいなくて、おばあさんと弟さんと暮らしてたんだ。お二人には丁重にお詫びしてきたよ。

穂香 怒ってなかった？

敏行 恨み言みたいなことは言われなかったな。弟さんはこう言ってた。「兄は人助けをして死んだんです。弟として誇らしいです」って。

穂香 (みねりに) よかったね。みねりさんのせいにされなくて。

みねり (敏行に) 明日、小山田さんの家に行くね。お線香を上げさせてもらって、自分の口でお詫びを言う。

登 ありがとうございます。

みねり え？

登 え？

みねり お義兄さん、今、「ありがとうございます」って言った？  
敏行 言っていないよ。

みねり 穂香ちゃんは？

穂香 「ありがとうございます」って？言っていないよ、そんなこと。

みねり え？でも、確かに今。

登 あなた、もしかして、僕が見えるんですか？

みねり (周囲を見回して) え？え？

登 僕はここですよ。……！

みねり おかしいな。誰もいないのに。

穂香 どうしたの、みねりさん？

みねり なんか、ちよっと、幻聴みたいなものが聞こえて。

敏行 まさか、頭を打った後遺症か？

登 違いますよ。この人には僕の声が聞き取れるんですよ。(みねりに) そうで

しょ？そうですよね？そうだと行ってください！

みねり うるさい！

穂香 みねりさん、しっかりして。

みねり ごめん、ちよっと気分が悪くなってきた。おトイレに行ってくる。

敏行 もう一度検査してもらった方がいいんじゃないか？

②みねりがトイレに行く。登が後を追う。敏行・穂香は去る

登 みねりさん、ちよっと待って！僕の話聞いてください！

みねりが急に立ち止まる。登が衝突直前で立ち止まる。みねりが背後を振り返る。登がみねりの目の前で手を振る。みねりが周囲を見回す。登がみねりの視線の先に回り込む。

みねり やっぱり誰もいないよね。

登 います。

みねり えっ？（周囲を見回す）

登 どうやらあなたには僕の姿が見えないようですが、僕は確かにここにいます。

あなた目の前に。

みねり いないよ。

登 います！いるんです！現に、あなたには僕の声が聞こえてるでしょう？

みねり （耳を塞ぐ）

登 あっ！狡い！（みねりの手を掴もうとするが、手が通り抜ける）ああっ！ク

ソツ！体がないって、なんて不便なんだ！

みねり 「体がないって、なんて不便なんだ」？

登 ええ、そう言いました。え？

みねり 何で？何で耳を塞いでも聞こえるわけ？

登 そうか、わかった！

みねり 何が？

登 それはおそらく、僕があなたの耳じゃなくて、あなたの心に話しかけてるから

です。僕は幽霊ですからね。体がないから、声帯を震わせて、息を声に変えることはできない。だから、実際には声を出してないんです。その証拠に、

あなた以外の人には聞こえない。

みねり あなた、今、幽霊って言った？

登 はい。

みねり ということは、あなた、死んでるの？

登 ええ、今から三日前に交通事故で。

みねり 冗談言わないでよ。何で私が幽霊に話しかけられなきゃいけないのよ。私が

何かした？

登 何もしてません。したのは僕です。

みねり 何をしたのよ、あなた。

登 僕は小山田登。トラックに撥ねられそうになったあなたを助けて、代わりに

死んだ男です。

みねり あー、何だ、そういうことか。

登 そういうことって？

みねり 私は小山田さんの死に対して、責任を感じてる。自分が許せないと思ってる。

その気持ち小山田さんの声になって、自分自身を責めてるんだ。

登 つまり、僕の声はあなたが作り出した幻聴だと？

みねり そう、幻聴、幻聴。

登 じゃ、試しに聞きますけど、僕の弟の名前はご存知ですか？

さあ。

登 小山田優です。じゃ、祖母の名前は？

みねり 知らない。

登 小山田澄子です。僕があなたの作り出した幻なら、なぜあなたの知らないこ

とを知ってるんです。

みねり じゃ、やっぱり、幽霊？

登 そうです！幽霊です！まさか自分が幽霊になるとは思ってたし、こう

して「幽霊です！」って主張することになるとも思ってたけど、そ

れでもやっぱり、僕は幽霊なんです！

みねり だとしてもよ、何で私にはあなたの声が聞こえるわけ？霊感なんてないのに。

登 僕はあなたの身代わりになって死んだ。そのおかげで、僕らは特別な絆で結ばれたんでしょう。

みねり もしかして、私のこと、恨んでるの？私のせいで死んだから。

登 そんなふうには思ってません。

みねり じゃ、何で私の前に現れたのよ。

登 昨日、葬式が終わって、することがなくて、あなたのことを思い出して。要するに、暇だったから？ねえ、あなた、いくつ？

登 三十七歳、独身。祖母からは、若い頃の草刈正雄にそっくりだって言われてました。

みねり どうせ見えないと思って、見栄張ってない？

穂香がやってくる。

穂香 みねりさん、具合はどう？

みねり もう大丈夫。心配かけてごめんね。

穂香 幻聴は？

みねり 今は全然聞こえない。穂香ちゃんこそ、頭痛は大丈夫？

登 みねりさん、ちょっと待って！僕の話はまだ終わってません！

穂香 みねりが去る。後を追って、登が去る。

①誠二郎がやってくる。

誠二郎● 花巻さんはタクシーで自宅に帰りました。家は義兄の上郷さんがローンで購入したマンション。すぐ近くを多摩川が流れていました。花巻さんは十二年前から、このマンションで上郷さんの一家と暮らしていました。

八月四日夕、調布市の上郷敏行の家。みねり・敏行・穂香がやってくる。穂香はリュックを背負い、バッグを持っている。誠二郎は去る。

みねり (部屋を見回して) たったの三日、留守にただけなのに、この散らかりよ

うは何？

穂香 全部、お父さんの仕業だよ。何でもかんでも出しっぱなしにするんだから。

みねり そういう時は、気付いた人が片付けないと。

敏行 そうそう。家族はそうやって助け合わないとな。

穂香 悪いけど、私にはそんな暇はないの。(みねりに) じゃ、私は寝るね。三時

間経つても起きてこなかったら、起こしてね。

みねり 頭が痛いんでしょう？そのまま朝まで寝れば？

穂香 ダメダメ。早退した分の遅れを取り戻さないと。

みねり　夕食は？食べられそう？

穂香　いない。

敏行　（みねりに）今夜はデリバリーにしよう。みねりちゃんもまだ本調子じゃないだろうし。

みねり　私は平気。でも、私がない間は どうしてたの？まさか、毎晩、デリバリー？

敏行　俺は毎日残業で帰りが遅かったから、駅前のコンビニで弁当を。

穂香　（みねりに）私は買い置き of 冷凍ピザとかカップラーメンとか。

みねり　どうして交替で作らなかったの。

登　登がやってくる。

登　いやあ、洗面所が大変なことになってますよ。洗濯カゴに服が山積みになってて。

みねり　（敏行・穂香に）洗濯は？誰もやらなかったの？

敏行　そろそろやらなきゃな、とは思ってたんだけど。

穂香　嘘！お父さん、今朝、何て言った？「俺、洗濯機の使い方わからないから、頼んだぞ」って、私に押し付けようとしたじゃない！

登　でも、結局、やらなかったんだね？

みねり　（敏行・穂香に）もういい。今から私がやる。

敏行　悪いな。じゃ、やつぱり夕食はデリバリーにしよう。

みねり　洗濯が終わったら、私が作る。お肉も野菜も、三日前のままなんでしょう？

悪くなる前に食べちゃわないと。

敏行　俺、何か手伝おうか？



登 洗濯機の使い方わからないヤツはかえって邪魔！

みねり お義兄さん、一応確認するけど、お風呂も一度も洗ってないよね？

敏行 今から洗う。洗い方はわかる。

敏行が去る。

穂香 私は？

みねり 穂香ちゃんは寝て。起こすのは三時間後だったよね？

穂香 うん。ごめんね、みねりさん。

穂香が去る。

登 あの子、態度はしおらしいけど、結局言葉だけなんだよな。（みねりに）甘

やかさないで、手伝わせたらどうですか？

みねり よし、まずは洗濯からだ。

登 また無視ですか。たまには返事ぐらいしてくださいよ。

みねり （目を閉じて）聞こえない。私には何も聞こえない。

登 自己暗示なんかかけても無駄ですよ。悪いけど、僕はしゃべり続けますから。

みねり （目を閉じたまま）他人の家に勝手に入り込んで、文句ばかり並べる幽霊

なんて、絶対いない。

登 勝手じゃありませんよ。玄関で「お邪魔します」って言ったじゃないですか。

②みねり・登が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ●

花巻さんは洗濯をして、夕食を作って、穂香さんを起こして、三人で食べて、食器を洗いました。その間も、小山田くんはずっとしゃべり続けましたが、花巻さんはすべて無視しました。

みねり・登がやってくる。みねりは麦茶の入ったコップを持っている。誠二郎は去る。

登

いやあ、お疲れ様でした。これだけ動き回れるってことは、事故の後遺症は全くないようですね。せつかく助けたのに、病院に入院したって聞いて、心配してたんですよ。でも、あなたは無事に元の生活に戻れた。よかった、よかった。

みねり

でも、まだ幻聴が聞こえる。

登

ん？今のは僕に話しかけたのかな？

みねり

独り言。

登

独り言にしては、僕の質問に対する回答になってませんか？え？え？

みねり

うるさいうるさいうるさい！こっちは家事で忙しいのに、余計なことをペチャクチャペチャクチャ。でも、私はもう決めたの。二度と返事をしないって。

登

でも、今、しますが。

みねり

これが最後！だから、私のことは放っておいて！

龍平がやってくる。

登

うわーっ！誰？誰ですか？

みねり どうしたの、龍平くん？おなか空いたの？

龍平 (頷く)

みねり 龍平くんの分は冷蔵庫にあるよ。温めようか？

龍平 自分でやる。

登 (みねりに) えーと、この人はこの家の人？

みねり (龍平に) 私がいない間、食事はどうしてたの？穂香ちゃんみたいに、カツ  
ラーメン？

龍平 それだと体に悪いから、素麺を茹でてた。

みねり 三日間、ずっと素麺？

登 かえって体に悪い気がするけど。

みねり (龍平に) でも、お義兄さんや穂香ちゃんと違って、ちゃんと自分で作った  
んだね。偉いよ。

登 そうか。この人は上郷さんの息子さん、つまり、あなたの甥っ子さんですね？

龍平 みねりさん、お見舞いに行かなくて、ごめんね。

みねり いいの、いいの。検査をしただけで、どこも悪くなかったんだから。

龍平 みねりさんが無事で良かったよ。助けてくれた人のおかげだね。

みねり うん。

龍平が去る。

登 いいこと言うなあ。(みねりに) 彼、病気か何かですか？あの恰好からする

と、外から帰ってきたんじゃないかって、自分の部屋にいたんですね？みねり  
さんが帰ってくる前から。でも、おかしいな。彼は咳をしてなかったし、熱

もなさそうだった。ということは、病氣じゃなくて、精神的なもの？まさか、引きこもり？

みねり

その言い方はやめて。

登

あ、やっと反応してくれた。

みねり

龍平くんは引きこもりじゃない。まあ、一時はそういう状態になっちゃった

けど、今は通信制の大学に入って、毎日勉強してる。

登

自分の部屋で、ですよ？

みねり

まあね。

登

外出はできるんですか？

みねり

それはまだ。でも、前は自分の部屋から一歩も出られなかった。その頃に比べたら、大きく進歩してるの。だから、おかしなレッテルを貼らないで。

登

わかりました。申し訳ありませんでした。

みねり

謝らなくていい。

登

いや、僕はあなたに反応してほしくて、わざと気に障る言い方をしたんです。

ごめんなさい。

みねり

もういい。今度は私に謝らせて。

登

僕を無視したことをですか？

みねり

それもそうだけど、一番最初。あなたが助けてくれなかったら、私は死んでた。それなのに、今までお礼も言っただけでなかったし、お葬式にも行かなかった。

登

それは入院してたからでしょう。仕方ないですよ。

みねり

小山田登さん、だよ？

登

僕はこっちです。

みねり

こっちってどっち？

登 あなたから見て、一〇時の方向です。

みねり 一〇時？あ、こっちか。小山田さん、私を助けてくれてありがとう。この御

登 恩は一生忘れません。

登 僕が今、ここにいることを認めてくれたんですね？

みねり うん。仕方なく。

登 仕方なくか。でもでも、今、あなた、「この御恩は一生忘れません」て言い

ましたよね？

みねり 言っただけ、何か、イヤな予感。

登 『鶴の恩返し』の昔から、この国には「恩返し」という言葉があります。い

い言葉です。が、亡くなった人に恩返しをすることは誰にもできない。とこ

ろが、僕はここにいます。あなたは恩返しできるんです。どうです？ラッキー

だと思いませんか？

みねり なんか、テレビ・ショッピンみたいな口調になってない？

登 僕はまだ三十七です。死ぬにはあまりに早すぎる。やり残したことがいっぱい

あります。

みねり それを私にやれって言うの？

登 お恥ずかしい話ですが、僕はまだ『スター・ウォーズ』のエピソード9を見

てません。富士山にも五合目までしか登ってません。大谷翔平のホームラ

ンを見に、ドジャースタジアムに行きたかった。

みねり それ、今からでも出来るんじゃない？あなた一人で。

登 ええ、いずれやります。でも、その前に、どうしてやりたいことがある。た

だし、これは僕一人じゃ出来ない。あなたの力を借りないと。

みねり それは何？あ、一応言っておくけど、やるかどうかはわからないからね。聞

いてから決める。

登 僕は小説を書きたいんです。

みねり 無理。それはいくら何でも無理。私、子供の頃から作文、苦手だし。

登 あなたに書けなんて言ってます。口述筆記をしてほしいんです。

みねり ああ、あなたが口で言ったことを、私は文字にすればいいのね？

登 その通りです。僕は出版社で編集の仕事をしてたんですが、元々は作家になりました。そう思い始めたのは高校生の時で、何作か書いて、コンクールにも応募したんですが、一度も入賞しなかった。就職してからも執筆は続けて、ようやく自信作と呼べるものが書けて、いや、あとちょっとで書き上がるって所まで来たのに。

みねり 事故に遭ったのね？

登 僕の仕事は本を出すことです。が、それは全部、他の人が書いたもの。僕は自分が書いた本を出したかった。一冊でいいから、出したかった。

みねり 気持ちにはわかるけど、本になるかどうかは出来次第じゃない？

登 わかってます。だから、あなたには小説が完成するまで手伝ってほしい。この通りです。（頭を下げる）

みねり この通りって？

登 頭を下げたんです。九〇度の角度で。

みねり でも、そんなこと出来るかな。声しか聞こえないのに。

穂香がやってくる。

穂香 みねりさん、今のは何？独り言？

みねり 穂香ちゃん、落ち着いて聞いてくれる？実はね。

登 僕のこととは言わない方がいいですよ。正気を疑われるに決まっています。

穂香 (みねりに) 実は何？

みねり 実は病院にずっと一人でいたら、独り言を言う癖がついちゃって。

穂香 そうだったんだ。心配して損したな。私、先にお風呂に入ってもいい？三時

間も寝たのに、まだ眠くて。

みねり 無理しないで、今日は終了ってことにしたら？

穂香 そういうわけには行かないの。

穂香が去る。

登 根性あるなあ。家事は全然やらないけど。

みねり お風呂、覗きに行かないでよ。

登 行きませんよ！それより、僕の頼み、聞いてくれますか？

みねり 口述筆記？でも、私、パソコン持ってないし。

登 そのことについては考えてあります。まずはですね。

みねり・登が去る。

## ①誠二郎がやってくる

誠二郎 ● 次の日の朝、花巻さんはいつも通り、朝六時に起きました。昨日の分の洗濯をして、敏行さんと穂香さんを起こして、龍平くんにも部屋の外から声がけをして、家族四人の朝食を作りました。

八月五日朝、敏行の家。敏行・みねり・登がやってくる。敏行はカバンを持っている。誠二郎は去る。

みねり お義兄さん、今日は帰りは？

敏行 昨日早退したから、残業の可能性が高い。わかったら、連絡する。

みねり そう言って、五回に四回は忘れるんだから。

敏行 あ、みねりちゃん、今日は小山田さんの家へ弔問に行くんだよね？後で住所をラインするね。

登 (みねりに) 僕が案内しますよ。

みねり (敏行に) 大丈夫。自分で何とかなる。

敏行 どうやって？警察に電話して聞くの？

みねり それは無理だよ。やっぱりラインして。



穂香がやってくる。リュックを背負っている。

穂香 みねりさん、ごめん。食欲ないから、食べずに行く。

みねり ダメダメ。昨夜だって、半分以上残したじゃない。

敏行 (穂香に) あんまり不規則な生活をしてると、そのうちぶっ倒れるぞ。

穂香 お父さんはどうなの？ 毎日毎日残業で、いつも胃が悪そうな顔してるじゃない。

登 (みねりに) 確かに、食後にガスターOを飲んでました。

穂香 (敏行に) 残業して褒められたのは昭和の話。今時の有能なサラリーマンは仕事の効率を良くして、定時に帰ってるらしいよ。

敏行 おまえは俺が無能だって言いたいのか？

みねり ストップ！あと三分でバスが来るよ。

敏行・穂香 行ってきます！

敏行・穂香が去る。

登 あの二人、一緒にいる時はほとんど喧嘩してませんか？

みねり 言いたいことが言い合えるのは、悪いことじゃないと思う。

登 でも、最低限の思いやりは必要でしょう。特に許せないのは、穂香ちゃんだ。人に作ってもらった食事を食べないなんて、言語道断です。

龍平がやってくる。

みねり あ、龍平くん、今朝は早いね。朝ご飯はどうする？パンでも焼こうか？

龍平 穂香、食べなかったんだよね？

みねり 代わりに食べてくれるの？ありがとう。

登 (龍平に)君だけはほんの少しだけ思いやりがあるようだな。そうだ。みねりさん、彼にちよつと聞いてみてくれませんか？

みねり 何を？

龍平 え？

みねり あ、その、龍平くんにちよつと聞きたいことがあつてね。

登 食事の後、自分が使つた食器を洗つてみようとは思わないかい？

みねり (龍平に)食事の後、自分が使つた食器を洗つてみようとは思わないかい？

龍平 え？

みねり イヤならいいよ。龍平くんも勉強が忙しいだろうし。

龍平 別に忙しくない。洗うよ。

龍平が去る。

みねり 信じられない。あの子が家事を手伝うなんて。

登 あなたはさつき、こう言いましたよね？言いたいことが言い合えるのは、悪いことじゃないって。だったら、あなたも言うべきじゃないですか？

みねり 家事を手伝えって？

登 「手伝え」じゃなくて、「やって」です。家事っていうのは本来、家族全員で分担してやるものでしょう？

みねり　でも、私以外はみんないろいろ大変なんだよね。

②みねり・登が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ●　それから花巻さんは掃除とゴミ出しをして、家を出ました。調布駅から電車に乗って、東西線の西葛西へ。小山田くんの家は、駅前のイタリアンレストランで、二階が住居になっていました。

江戸川区西葛西にある、登の家。みねり・登・優がやってくる。みねりはバッグを持っている。誠二郎は去る。

優　（みねりに）すいませんね、わざわざこんな遠い所まで。

みねり　遠くなかったですよ。電車で一時間ちよつとだったし。

優　そうなんですか？俺、山手線より西に行ったことがなくて、調布って町がどこにあるのか、イマイチ掴めてなくて。確か、八王子のあたりですよね？

みねり　いいえ、もう少し手前です。

優　なるほどね。とにかく、わざわざお越しいただいて、本当にありがとうございます。花巻さんの無事な姿を見て、天国の兄貴も喜んでと思います。

登　まだここにいるけどね。

みねり　（優に）あの、仏壇に飾ってあった写真は？

優　あ、花巻さんは兄貴の顔を知らないんですよ。あの写真が兄貴です。え？でも、小山田さんは若い頃の草刈正雄にそっくりだって。

登　僕じゃなくて、祖母が言ったんです。

優 花巻さん、兄貴と話をしたことがあるんですか？

みねり いいえ。その、義兄がお葬式の時に他の方から聞いたそうで。そう言えば、

お葬式に伺えなくて、申し訳ありませんでした。

優 その代わり、こうして線香を上げに来てくれたじゃないですか。それで十分ですよ。

澄子がやつてくる。グラスを載せたトレイを持っている。

澄子 花巻さん、アイステイーにレモンは入れる？

みねり あ、どうかお構いなく。

澄子 まあまあ、お互い顔を合わせるのは初めてだけど、あんたは登が命懸けで助けた人だ。もう赤の他人じゃない。だから、遠慮ナシで行こうよ。

みねり すみません。じゃ、入れてください。

澄子 よし来た。(グラスにレモンを入れる)

優 (みねりに)俺もばあちゃんと同じ気持ちですよ。花巻さんには何の恨みもない。だから、またいつでも遊びに来てください。

みねり ありがとうございます。

登 じゃ、そろそろ本題に入りましょうか。

澄子 (みねりに)よかったら、お昼食べててよ。うちのランチは評判がいいんだ。もちろん、お代はいただかないよ。

みねり 残念ですが、この後、用事があるので。

澄子 まあ、そう言わないで。うちの店は死んだ旦那が始めたんだけどね、今年でちょうど四〇年になるんだ。味は保証するよ。

優 （みねりに）ばあちゃん、この歳になっても、調理場に立つてるんですよ。

じいちゃんの味を守るんだって。

澄子 まだおまえには任せられないからね。

登 みねりさん、本題に。

澄子 （みねりに）私たち夫婦には娘が一人いたんだけどね。お嫁に行って十年目に、登と優を連れて出戻ってきた。で、またすぐに別の男の所へ行っちゃまった。登と優を残してだよ。「落ち着いたら迎えに来ます」とか何とか言うて。

優 （みねりに）僕が五歳で、兄貴が九歳の時です。

澄子 （みねりに）仕方ないから、私たちが育てたよ。まあ、二人ともいい子だったから、あんまり手がかからなかったけど。

優 （みねりに）いや、俺の面倒は兄貴が見てくれたんですよ。

登 みねりさん、このままだと長くなりますよ。

みねり （優に）優しいお兄さんだったんですか？

登 みねりさん！

優 （みねりに）そりゃあもう。勉強は出来るし、ケン力は強いし、学校でも有名な人でした。俺は小山田登の弟だってことで、イジメに遭わずに済んだんです。ただ、一つだけ欠点があつて。

登 言うな！（優の口を塞ごうとする）

澄子 モテなかったことだね。

登 ああ。（頭を抱える）

澄子 （みねりに）それが私には不思議だったんだよね。あの子はなかなかのイケメンだったよ。若い頃の西田敏行にそっくりだった。

みねり

草刈正雄じゃなくて？

登

嘘をついてすみませんでした。

優

（みねりに）でも、俺にとっては自慢の兄でした。

澄子

（みねりに）この子だつていい子だよ。うちの旦那が亡くなったら、すぐに調理師の学校に入って、免許を取った。私一人だったら、とくに潰れてたよ。

優

（みねりに）今はファミレスに押されて、経営はギリギリなんですけどね。

澄子

（みねりに）この子は登と違って、算数が苦手だったんだ。でも、女の子にはよくモテた。お陰様で、来月結婚するんだよ。

みねり

（優に）それはおめでとうございます。

登

みねりさん、もう十分じゃないですか？

みねり

（優に）あの、登さんのお部屋を見せていただいてもいいですか？

優

どうぞどうぞ。俺が案内しますよ。

登

（みねりに）いやあ、自分の噂話を目の前で聞くのがこんなに辛いとは思いませんでした

③みねり・登・優が登の部屋に行く。

優

（みねりに）男の部屋にしては綺麗でしょう？兄貴は子供の頃から几帳面だったんですよ。

みねり

（机の上のノート・パソコンを指して）これ、登さんのパソコンですよね？

優

ええ、それが何か？

みねり

もしご迷惑でなければ、何日か貸していただだけませんか？

優 何のために？

みねり 登さんがどんな人だったのか、もっと知りたくて。

優 でも、弟の俺も中を見たことはないんですよ。日記でも書いてたらまずいし。

みねり まずいと思ったものには絶対に手を付けません。だから、ぜひ。

優 いや、やっぱり無理ですよ。

登 本人がいいって言うてるんだ。素直に貸せ！

みねり (優に) 実は私、登さんの友達なんです。

登 なぜそんなバレバレの嘘を。

優 (みねりに) 本当ですか？ だったら、なぜ今まで黙ってたんです。

みねり 知り合ったのがつい最近で、まだお互いのことをあまりよく知らないし、友

達だと思っていたのは私だけだったかもしれないと。

優 じゃ、事故の時は二人で歩いてたんですか？

みねり ええ。

優 だから、あなたを助けたのか。そういうことだったのか。

登 まさか信じるのか？

みねり (優に) 登さんは今、小説を書いていて、ぜひ私にも読んでほしいって言ったんです。

優 兄貴が小説を？ そんな話は聞いたことがないけど。(ノートパソコンを開い

て) でも、このパソコン、ロックがかかってるから、パスワードを入れない

と、開きませんよ。

みねり パスワードなら、登さんから聞いてます。(周囲を伺う)

登 AYANAMIREI。

みねり (優に) AYANAMIREI。

優 （キーを叩きながら）AYANAMIRE!。開いた。

登 なぜこんなパスワードにしてしまったんだ。

優 （みねりに）パスワードまで教えたってことは、やっぱり兄貴はあなたを友達だと思ってたんですよ。わかりました。お貸しします。

みねり ありがとうございます。

優 あの、おかしなことを聞くようですが、兄貴は俺の結婚について何か言ってもせんでしたか？

みねり 何かって？

優 だから、賛成とか反対とか。

登 そんなの、賛成に決まってるだろう。

優 （みねりに）いや、実は彼女に言われたんですよ。「お兄さんが亡くなってすぐに結婚なんてできない。式を延期しよう」って。

登 何だと？

優 兄貴が生きてたら、何て言うだろうな。

登 決まってるだろう！俺のことなんか気にしないで、式を挙げろ！延期なんて絶対に反対だ！

みねり・登・優が去る。



①誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 花巻さんは小山田くんのノートパソコンを持って、西葛西を出ました。そのまま帰宅するつもりだったのですが、小山田くんにちよつと用事があると言われて、目黒にある徳丸書店に行きました。

八月五日昼、品川区目黒にある徳丸書店。みねり・登・麻衣子がやってくる。みねりはバッグとノートパソコンが入ったバッグを持っている。

麻衣子 (みねりに) 宮守は朝から打合せに行ってましてね。もうそろそろ帰社すると思っんですが。

登 (みねりに) じゃ、帰ってくるまで待ちましょう。

みねり (麻衣子に) お帰りになるまで待たせてください。

麻衣子 失礼ですが、宮守とはどのような関係で？

みねり お会いしたことはありません。私は小山田さんの知り合いで。

麻衣子 ああ、小山田優さんの。

みねり いいえ、お兄さんの登さんの。

麻衣子 まさか。

みねり 違いますよ！最近知り合ったばかりで、何度か話をしただけです。

麻衣子 ですよ。小山田くんとは彼が入社してから十五年の付き合いになりますけど、浮いた話は一度も聞いたことがありません。

登 あなたに言わなかっただけです。僕だって、ロマンスの一つや二つ。

麻衣子 (みねりに) はつきり言って、ロマンスとは全く無縁な人でした。

登 もういいです。仕事に戻ってください。

麻衣子 (みねりに) でも、編集者としては非常に優秀だったんですよ。特に新人を

育てるのが上手で、彼のおかげで有名になった人は何人もいます。もしかして、あなたも作家志望？

みねり いいえ、とんでもない。

麻衣子 でも、それ、ノートパソコンですよ？その中には書きかけの小説が？

みねり あ、これは小山田さんのです。小山田さんは。

登 言わないで！僕が小説を書いていることを秘密にしてたんです。

麻衣子 (みねりに) 小山田くんは、何ですか？

みねり 小山田さんは新しいのを買うから、これは私にくれるって。

麻衣子 じゃ、それは小山田くんの形見？

ええ。今、西葛西のお宅へ行って、いただいてきたんです。大切に使おうと思います。

弓奈がやつてくる。

弓奈 部長、ただいま戻りました。

麻衣子 待ってたのよ、宮守さん。(みねりを示して) こちらは花巻さん。小山田く

んの知り合いで、あなたに会いにいらしたの。

みねり

(弓奈に)初めまして、花巻です。

弓奈

宮守です。今日はどのようなご用件で。

みねり

用件はですね。(周囲を伺う)

登

彼女に聞いてください。結婚式を延期するって言い出したのは本当かって。

みねり

え?そんなこと。

弓奈

そんなこと?

登

(みねりに)いいから早く。

みねり

(弓奈に)えーと、あのですね、初対面の私がこんなことを聞くのもどうかと思うんですけど、さつき小山田さんのお宅へ伺ったら、あなたが結婚式を延期するって言い出したって。

麻衣子

そうなの、宮守さん?

弓奈

はい。

登

理由は僕が死んだから?

みねり

(弓奈に)理由はやっぱり、小山田さんが亡くなったから?

弓奈

そうです。お兄さんが亡くなって、ひと月も経たずに結婚式を挙げるなんて、常識的にありえないと思うんです。

登

そんなことはない!

麻衣子

(弓奈に)まあ、仕方ないかもね。

登

仕方なくない!

麻衣子

(弓奈に)私は仏教の信者じゃないけど、人間の魂は亡くなってから四十九日目に極楽浄土へ行くんだって。つまり、今はまだこの世にいるのよ。

登

ええ、いますよ。いるけど、僕のことには気にしなくていい。

麻衣子 (弓奈に)せめて四十九日が過ぎてからの方が、小山田くんも喜ぶんじゃない?

登 喜ばない!いいからあなたは仕事に戻ってください!

弓奈 花巻さんはこのことを確かめにいらしたんですか?

みねり ええ、まあ。

弓奈 失礼ですけど、あなたのことは優くんから聞いてなくて。だから、式にもお招きしてませんよね?それなのに、どうして?

登 みねりさん、もうすぐお昼です。

みねり はあ?

登 彼女を食事に連れ出してください。そこで僕が説得します。

みねり 違うでしょ?説得するのは私でしょ?

麻衣子 え?今、何て?

登 あなたがいると、話が先に進まないんだ。さあ、みねりさん。

みねり (弓奈に)良かったら、私と食事に行きませんか?いろいろお話したいことがあるんで。

麻衣子 わかりました。行きましょう。

みねり 申し訳ありませんが、二人だけにしていただけですか?

麻衣子 私はお呼びでない?大丈夫です。私はお弁当を持ってきましたから。

②みねり・登・麻衣子・弓奈が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ●

花巻さんと宮守さんは会社を出て、目黒駅の方へ歩き出しました。小山田くんには彼の行きつけのトンカツ屋を勧められましたが、あっさり聞き流して、

コーヒーショップに入りました。

徳丸書店の近くのコーヒーショップ。みねり・登・弓奈がやってくる。みねりはバッグを二つ持っている。弓奈はグラスとサンドイッチを載せたトレイを持っている。

弓奈 花巻さんの下のお名前って、「みねり」ですか？

みねり ええ、そうですけど。

弓奈 それじゃ、もしかして、事故の時、小山田さんが助けた人？

登 (みねりに) 優から聞いたんですよ。優に話した時みたいに、友達だったってことにしましょう。

みねり (弓奈に) 実はそうなんです。私と小山田さんは事故の前から友達で、あの日は二人で歩いてたんです。

弓奈 だから、あなたの身代わりになったんですか。ひよっとして。

みねり・登 それはない！

弓奈 まだ何も言っていないのに。

登 みねりさん、説得を開始しましょう。今から、僕の言う通りに話してください。弓奈さん、私は結婚式の延期には反対です。

みねり え？

登 さあ。

みねり 弓奈さん、私がこんなことを言い出したらきつと驚くだろうし、自分でも本当にさしでがましいと思うんだけど、私は結婚式の延期には反対です。なぜですか？

登 小山田さんはあなた方の結婚を喜んでた。式を延期したら、かえって彼を

悲しませることになります。

みねり (弓奈に) 小山田さんはあなたの方の結婚を喜んでいた。式を延期したら、何だっけ？

弓奈 でも、別に結婚をやめるわけじゃない。あくまでも延期ですよ。

みねり そうですよ。

登 納得しないでください。続き、行きますよ。延期なんて絶対にしない方がいい。

みねり い。ここまで来るのにどれだけ苦労したか、あなたは忘れたんですか？

弓奈 無理！私は事情が何もわかってないんだよ。それなのに、説得なんて。

みねり 花巻さん、どうしたんですか？

みねり ごめんなさい。一から質問していいですか？そもそも、あなたは小山田さん

の同僚ですよ？そのあなたがなぜ小山田さんの弟さんと結婚することにな

ったんですか？

登 そんなことを知らなくても、説得は出来る。

みねり (弓奈に) お願い。教えて。

弓奈 わかりました。お話しします。

登 ああ、もう！勝手にしてください！

登が去る。

弓奈 (みねりに) 小山田さんは私の四年先輩で、入社した時からいろいろお世話

になってたんです。で、ある時、食事に誘われて。

みねり デートですね？

弓奈 それが違うんです。「僕の家はイタリアンレストランをやってるんだ。よか

ったら、一度食べに来ないかって。行ってみたら、信じられないほどおいしくて。で、小山田さんにお礼を言ったら、厨房に入っっていつて。

登・優がやってくる。優はシェフの服装。

登 宮守さん、こいつが僕の弟の優。今日の料理は全部こいつが作ったんだ。

弓奈 (優に)ご馳走様でした。信じられないほどおいしかったです。

登 (優に)この人は俺の同僚の宮守さん。俺の四年後輩だから、おまえと同じ年だ。

優 (弓奈に)え？タメ？出身、どこ？

弓奈 神戸です。

優 あ、ごめん。俺、山手線より西に行ったことがなくて。神戸って確か、京都のあたりだよな？

弓奈 まあ、広い意味で言えば。

優 ヴィッセル神戸の試合、見に行ったことある？

弓奈 私、サポーターです。小学一年の時から。

優 うわあ、筋金入りじゃん。俺は浦和レッズのサポーター。で、中学も高校もサッカー部。今は友達とフットサルのチームを作ってる。良かったら、試合見に来ない？

弓奈 行きます、行きます！次はいつですか？

登・優が去る。

みねり で、付き合い始めたよ。

弓奈 優くんて、料理も上手だけど、サッカーも凄いですよ。で、毎試合応援に行ってるうちに、仲良くなってる。

みねり プロポーズはどっちから？

弓奈 優くんです。私の誕生日にお店に招待してくれて、フルコースをご馳走してくれて、最後にコーヒートデザートと薔薇の花束を。

みねり やるなあ、優くん！そんなことされたら、断れないよね。

弓奈 まあ、私も歳も歳だし、そろそろとは思ってたんで。

みねり なるほどね。小山田さんは二人の出会いのきっかけを作ったわけだ。

弓奈 だから、その日のうちに報告しました。小山田さんが帰ってくるのを待って。

登・優がやってくる。

登 あれ？宮守さん、今日も来てたんだ。

優 兄貴、聞いてくれ。実は俺たち、結婚することになった。

登 結婚？ちよっと待て。そもそもおまえと宮守さんは付き合ってたのか？

優 は？俺の試合、いつも応援しに来てくれてただろう？気付かなかったのか？

登 いや、俺は「宮守さん、本当にサッカーが好きなんだな」って。

弓奈 それだけなら、ヴィッセル神戸を応援しに行ってます。

優 （登に）宮守さんは俺にはもったいほど素敵な人だけど、俺、頑張ってる幸せにするから。

弓奈 そうじゃなくて、二人で力を合わせて幸せになるんでしょう？

優 そうそう。（登に）これも、俺たち二人を引き合わせてくれた兄貴のおかげ



だよ。ありがとう。

弓奈

(登に) ありがとうございます。

登

そうか。あまりの衝撃になかなか頭が追いつかないけど、俺のことはどうでもいい。二人ともおめでとう。どうか幸せになってください。

優が去る。

みねり

(弓奈に) ああ、羨ましい。聞けば聞くほど、順風満帆じゃない。

弓奈

いいえ、苦労したのはここからなんです。付き合い始めて一年も経ってなかったから、お互いのことがあまりわかってなかったんですね。結婚した後のことを話し合ったら、ことごとく意見が対立して。

みねり

ああ、子供はどうするとか？

弓奈

彼は最低三人はほしいうて言っただけ、そんなことしたら、私は何年休職することになるか。彼ったら、「俺が食わせてやるから、辞めちまえ」って。

みねり

わあ、意外と昭和だったんだ。

弓奈

でも、私たちが喧嘩するたびに、小山田さんが仲裁に入ってくれて、何とか今日まで漕ぎ付けたんです。でも。

登

でも、何ですか？

みねり

うわあつ！戻ってたんだ。

弓奈

戻ってたって？

みねり

えーと、話がいつの間にか現在に戻ってたんだなって。

弓奈

そうです。小山田さんの事故があつて、また改めて考えたんです。式のことだけじゃなくて、結婚自体を。

登 何だって？

みねり (弓奈に) 延期じゃなくて、ナシにするってこと？

弓奈 だって、いろいろ心配で。

登 もしかして、店のことか？ 近頃あんまり儲かってないみたいだし。

みねり (弓奈に) もしかして、お店の経営が心配？

弓奈 あ、それは全然。私、こう見えても、経済学部出身なんで、いろいろアドバースできると思います。

登 じゃ、何が問題なんだ。

弓奈 (みねりに) 彼ってとっても仕事熱心なんですけど、友達付き合いも熱心すぎるって言うか。試合がない時は友達とドライブに行ったり、キャンプに行ったりするんです。で、中には女の人もいるみたいで。

登 あいつ、まさか、浮気を？

弓奈 (みねりに) 彼は「ただの友達だ」って言い張るんですけど、そうだとしてみても、キャンプは行き過ぎじゃないですか？ それで思っただけです。私たち、やっぱり住む世界が違うんじゃないかって。

みねり なるほど。意外と根が深いんだ。

弓奈 だから、とりあえず式を延期して、じっくり考えたいんです。

みねり・登・弓奈が去る。

①誠二郎がやってくる。

誠二郎● 花巻さんは宮守さんと別れて、中野に向かいました。駅前のスポーツジムで週に五日、インストラクターをしているのです。今日はエアロビクスとキッズダンスのふたコマ。たっぷり汗をかいて、ジムを出ました。

八月五日夕、中野区中野のスポーツジム。みねり・登がやってくる。みねりはバッグを二つ持っている。

登 花巻さん、僕はあなたを見直しました。まさか、あんなにダンスが上手だなんて。しかも、踊っている時のあなたは美しい。とても僕より年上には見えません。

みねり 私の歳、知ってるんですか？

登 生徒さんが噂してたんですよ。「あれでアラフォーだなんて信じられない」って。

みねり そうだよ、アラフォーだよ。あなたより年上なんだから、もう少し敬意を払って。

登 僕は最初からそうしてるつもりですけど。

みねり　　だったら、頭ごなしにああしろこうしろって命令するな。  
登　　いや、僕はあくまでも、あなたにお願いしてるだけで。

みねり・登が去る。

誠二郎●　電車を乗り継いで、調布まで戻ると、花巻さんは駅の南口の東急ストアに入りました。仕事帰りにここで買い物をするのが、彼女の日課になっていました。

調布市のスーパー。みねり・登がやってくる。みねりはバッグ二つと買い物袋を持っている。

登　　随分たくさん買い込みましたね。

みねり　　昨夜は冷蔵庫に溜まっていたもので適当に済ませちゃったからね。今夜はもう少し手の込んだものを。

登　　みねりさんは料理も得意なんですか？

みねり　　得意でも好きでもない。ただ、十年もやっていると、自然と慣れてきて。

登　　十年？

みねり　　正確には十二年かな。

登　　十二年前に何があったんですか？

みねり　　お姉ちゃんが亡くなったの。で、私が後を継いだわけ。

みねり・登が去る。

誠二郎 ● 東急ストアを出ると、花巻さんは歩いて自宅のマンションに向かいました。

が、マンションの前をあつさり通過。そして、多摩川の川岸まで来た所で、足を止めました。

多摩川の川原。みねり・登がやってくる。みねりはバッグ二つと買い物袋を持っている。みねりが土手の階段に座る。

登 いい眺めですね。ここに来るのも日課ですか？

みねり そう。ここで一休みしてから、夜の仕事に取りかかる。洗濯物を取り込んで、夕食を作って、お風呂の支度をして。夜が一番忙しいから、ここで気合を入れ直すの。

登 雨の日はどうしてるんですか？

みねり 雨でも来るよ。傘を差して。

登 それで気晴らしになりますか？

みねり 雨の方がかえっていいの。大声を出しても、文句を言われないから。

登 大声って？

みねり 「拙者親方と申すは、御立会のうちに御存知のお方もござりましようが」

登 うわあ、そんな声出したら、警察に通報されますよ。

みねり 大丈夫、大丈夫。三分で終わるから、パトカーが来る前に逃げ出せる。「お江戸を立てて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、青物町を上りへお出なさるれば」

登 それ、外郎売ですよ？舞台の俳優さんが発声練習でやる。

みねり

へえ、小山田さん、知ってるんだ。

登

担当してる作家さんが若い頃演劇をやってて、教えてもらったんです。

みねり

一緒にやる？

登

出来ませんよ。覚えてないんだから。

みねり

そうだよ。じゃ、失礼して。「欄干橋屋藤右衛門、只今は剃髪致して圓齋と名乗ります。元朝より大晦日まで御手に入れます此薬は、昔ちんの国の唐人ういうろうという人わが朝へ来り、帝へ参内の折から此薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ冠のすき間より取出す。依て其名を帝より頂透香と給はる。則ち文字にはいただきすくにおいと書いてとうちんこうと申す」

## ②みねり・登が去る。

誠二郎 ●

夕食が完成したのは夜の七時過ぎでした。が、敏行さんも穂香ちゃんも帰宅せず、連絡もなし。龍平くんは部屋に閉じ籠もったまま。仕方なく、スマホでニュースを見ていると。

八月五日夜、敏行の家。みねり・登がやってくる。みねりはノートパソコンを持ってくる。誠二郎は去る。

みねり

（スマホを操作して）あ、穂香ちゃんからラインが来た。お義兄さんからも。

別の場所に、穂香・敏行が現れる。

穂香 みねりさん、ごめん。電車で居眠りして、目が覚めたら京王八王子でした。

一時間後に帰ります。

敏行 みねりちゃん、ごめん。たった今、会議が終了。帰宅は九時過ぎの予定。

穂香・敏行が去る。

登 何やってるんだ、二人とも！

みねり 穂香ちゃんが心配だな。体の調子が良くないのかも。

登 優しいなあ。高校生にもなったら、自分で体調管理させないと。

みねり それでも、つい無理しちゃうんだよ。それをフォローしてあげるのが家族でしよう？

登 それはそうですけど、あなたのやり方はちょっと甘すぎませんか？

みねり 私のどこが甘いよ。

龍平がやってくる。

龍平 みねりさん、昨日からずっと独り言を言ってるね。

みねり そう？全然気が付かなかった。

龍平 部屋にいても聞こえるよ。まるで、見えない誰かと喧嘩してるみたいだ。

登 鋭い。(みねりに)さあ、どうやって誤魔化します？

みねり 龍平に私、先月、お芝居を見に行っただしょう？池袋のサンシャイン劇場に。そのお芝居が凄くおもしろくて、いくつか忘れられないシーンがあって、それを自分でやってたの。

龍平 そうだったのか。

登 信じるのか？普通の人はそんなことしないぞ。

みねり (龍平に) 夕食、出来てるけど、食べる？

龍平 今、レポート書いてるんで、書き終わったら。

登 また勝手なことを。

みねり (龍平に) 何時頃、完成しそう？

龍平 わからない。下手したら、十二時過ぎるかも。

登 だったら、今食べて、レポートを書くエネルギーにすればいいだろう。どう

してそうやって自分の都合しか考えないんだ。

みねり まあまあ。あ。(龍平を見る)

龍平 また芝居？

みねり そう。本当におもしろい芝居だったのよ。

龍平 じゃ、続けて。僕はレポート続けるから。

龍平が去る。

登 ああ、あなたのやり方を見てると、イライラする。この家の人たちが自分勝

手になったのは、あなたが原因ですよ。あなたの優しさが。

みねり 自分勝手は言い過ぎじゃない？別に私も困ってないし。

登 でも、あなたは妻でも母親でもない。ましてや、家政婦さんでもない。

みねり 仕方ないでしょう？この家には妻も母親もいないんだから。それより、今か

ら一時間は暇になったよ。口述筆記を始めない？

登 え？僕はあなたが家事を全部終わらせてからと思ってたんですが。



みねり 私もそうだけど、せつかく一時間空いたんだから。じゃ、準備するね。

みねりがノートパソコンを開き、操作する。

登 WORDを開いて、『ミスター・ムーンライト』ってファイルを出してください。

みねり それが小説のタイトル？

登 そうです。あ、どんな話か、説明しておいた方がいいですよ？

みねり 知らない。私は字を打っただけだから。

登 え？でも、日本語は同音異義語が多いじゃないですか。「かじ」って言っ

ても、炊事洗濯の「家事」、建物が燃える「火事」、鋼を鍛える「鍛冶」。どれにするかは、文脈がわかってた方が。

みねり (ノートパソコンを操作して) はい。文末が出たよ。続きをどうぞ。

登 いきなりは無理です。ちよつと読ませてください。

みねり どうぞ。(ノートパソコンを見て)「これでよかったのかな、かすみちゃん。

僕は君の力になれたのかな？」。はい、この続きは？

登 あー、そうやって急かされると、かえって何も浮かびません。

みねり でも、早くしないと、穂香ちゃんが帰ってくるよ。

登 そうだ。次は万葉集の短歌を引用しようと思ってたんだ。えーと、頭は確か。

ダメだ！思い出せない！

みねり 万葉集って、ネットで読めないの？だったら、本屋さんに行く？

登 花巻さん、今から僕の家に行ってもらえますか？

みねり え？何で？

登 本を取りに行くんですよ、万葉集の。引用しようと思ってた短歌のページに

付箋が貼ってあるんです。お願いします。

みねり

でも、穂香ちゃんが。

登

夕食なら、一人で勝手に食べますよ。さあ、行きましょう。

③みねり・登が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ●

花巻さんは再び電車に乗って、西葛西に向かいました。レストランは営業中でしたが、小山田くんに貸していた本を取りに来たと言って、中に入れてもらいました。万葉集には確かに付箋が貼ってありました。

登の家。みねり・登・澄子がやってくる。みねりは本を持っている。澄子はシェフの服。装。誠二郎は去る。

みねり

（澄子に）これです、これです。お忙しい所にお邪魔して、申し訳ありませんでした。

澄子

忙しいないよ。客なんか一組しか来てないし。昼はそれなりに混むけど、夜はいつも暇だね。このまま行ったら潰れるよ。

登

（みねりに）コロナで減ったお客さんがなかなか元に戻らないんですね。

みねり

でも、せっかく四十年も続けてきたのに。

澄子

私が死ぬまでは何とかして続けるよ。でも、その後、優がどうしようと、あの子の自由だ。元々料理を作る仕事があったわけじゃない。旦那が死んで、仕方なく継いだんだから。

登

仕方なくじゃない。おばあちゃんのこと放っておけなかったんだよ。

みねり (澄子に)おばあちゃんのことを放っておけなかったんじゃないですかね？

澄子 私はあんたのおばあちゃんじゃないよ。

登 (みねりに)言い忘れてました。祖母の名前は澄子です。

みねり (澄子に)ごめんなさい、澄子さん。

澄子 私の名前、誰から聞いたんだい？

みねり 登さんからです。もちろん、亡くなる前に。

優がやってくる。優はシェフの服装。

優 ばあちゃん、お客さん、帰ったよ。

澄子 だからって、店を空っぽにするんじゃないよ。不用心だろう？

登 花巻さん、優に言ってください。宮守さんに謝られて。

みねり え？何で？

澄子 何でって、レジには売り上げと釣銭が入ってるんだ。勝手に持っていかれたら、困るだろう？

登 (みねりに)宮守さんは結婚をためらってる。それは優の勝手な行動が彼女を不安にさせたからです。とりあえず、友達とドライブやキャンプには行くなって言ってください。

みねり 無理。出来っこない。

澄子 出来るよ。店に入って、レジの中身を取って、外の通りに出る。三分もかか

らないよ。

登 (みねりに)お願いします。この通りです。

みねり どの通り？

澄子

店の前を通ってる、西葛西虹の道だよ。

登

ばあちゃんは店に行けよ。不用心なんだろう？

優

花巻さん、大丈夫ですか？何か様子がおかしいけど。

みねり

優さん、こんなこと、私が急に言い出したら、ますますおかしいと思われるかもしれないけど、昼間、徳丸書店に行った時、宮守さんに会ったんです。

優

え？弓奈と？

登

(みねりに)宮守さんの下の名前は弓奈って言うんです。

みねり

で、その時、弓奈さんが言ってたんです。結婚式を延期したいのは登さんのことだけが理由じゃないって。

澄子

うちの店が潰れるんじゃないかって心配なんだろう？

みねり

違います。優さんは友達とドライブやキャンプに行く。その中には、女の人もいるって。

優

何だよ。弓奈のやつ、焼き餅焼いてるの？

みねり

そうじゃなくて、結婚後の生活に不安を感じてるって言うか。

優

別に浮気してるわけじゃない。どの子も俺の大切な友達だよ。まあ、中には元カノも何人かいるけど。

みねり

それじゃダメでしょう！

優

え？何で？

登

(みねりに)優に言ってください。宮守さんに謝れ。ドライブもキャンプも二度と行きませんって誓えって。

みねり

まさか、それを私に言わせるために、ここに来たの？

みねり・登・優・澄子が去る。

①誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● この後すぐにお客さんが来て、優くんは店に戻りました。花巻さんも自宅に戻り、口述筆記を再開。しかし、小山田くんの調子が上がらず、その夜はあまり進みませんでした。そして、次の日の朝。

八月六日朝、敏行の家。みねり・登がやってくる。誠二郎は去る。

登 花巻さん、お願いしますよ。あと一回だけでいいですから。

みねり どうして私が宮守さんを説得しなきゃいけないの？私は赤の他人だよ。

登 それはそうですけど、僕の言葉が伝えられるのは、あなたしかない。

みねり 小山田さん、ちよつと待って。確かに、私はあなたに恩がある。だから、小

説が完成するまで口述筆記をするって約束した。でも、約束はその一つだけ。私にも生活があるし、それ以上の事を求められても困る。

登 確かに、あなたは忙しい。この家の家事を一手に引き受けて、その上、スポーツジムでインストラクターまでしている。

みねり そう。私には暇がないの。

登 でも、あなたは生きてる。やりたいことをやる時間がまだまだたくさん残

ってますよね？でも、僕は死んでる。とりあえず今はこの世にいるけど、いつあの世に行くかわからない。一秒先かもしれないんです。

みねり だったら、小説を完成させなさいよ。優さんたちのことは諦めて。

登 諦めたくない。僕は二人に幸せになつてほしいんです。

みねり そこがわからないんだよね。もしかしたら、結婚しない方がお互いのためか

もしれないじゃない。

登 そんなことはない！

龍平がやつてくる。

みねり あ、龍平くん。今日も早いね。

龍平 今日は昨日とは別のシーン？

みねり そうそう。このシーンもよくつてき。つい真似したくなったの。

龍平 みねりさん、嘘ついてるよね？

みねり え？

龍平 だって、一回見ただけの芝居を、そんなスヒードで真似できる？

登 まさか、バレた？

みねり (龍平に)じゃ、何だつて言うの？

龍平 芝居じゃなくて、即興演技なんでしょ？設定だけ決めて、アドリブでセリフを言うやつ。

みねり 実はそうなの。一人の美女がワガママな幽霊に付きまとわれる話を一人でやってたの。

龍平 お姉さん、本当にお芝居が好きだね。

登 納得したのか？今の説明で？

敏行・穂香がやってくる。

穂香 あ、お兄ちゃん、おはよう。

敏行 (龍平に) 珍しいな、俺たちがいる時に、部屋から出てくるなんて。勉強はちゃんとしてるのか？

龍平 (頷く)

穂香 もう少し早く起きれば、一緒にご飯が食べられたのに。

敏行 無得無理。(龍平に) 食事は相変わらず自分の部屋でしてるんだろ？

龍平 (頷く)

敏行 まあ、焦らず少しずつだ。勉強、頑張れよ。(みねりに) じゃ、行ってきます。

穂香 (龍平に) 数学でわからない問題がいくつかあるんだけど、教えてくれる？

龍平 (頷く)

穂香 サンキュー。(みねりに) 行ってきます！

みねり 行ってらっしゃい。

敏行・穂香が去る。

みねり (龍平に) 穂香ちゃん、成績が伸びなくて、悩んでるのよ。もし龍平くんに

余裕があったら、助けてあげてほしい。

龍平 わかった。今夜、教えるよ。



みねり　　ありがとう。

龍平が去る。

登　　彼はあなた以外の人とは話が出来ないんですね？

みねり　　大学に入学してすぐに、部屋に閉じ籠もるようになってね。最初はお義兄さん

も怒っちゃって、毎日大喧嘩だったの。で、突然、口を利かなくなつて。

私と話をするようになったのも、ほんの二、三カ月前から。

登　　彼には幸せになってほしいですよね？

みねり　　当たり前じゃない。あの子のことは生まれた時から見てきてるんだから。

登　　僕も優に幸せになってほしいんです。たった一人の弟ですから。

みねり　　自分の小説より大事ってこと？

登　　宮守さんは本当にいい子です。優に足りないものを全部持つて。二人の結

婚式を見届けるまでは、僕はあの世には行きませんよ。

みねり　　それはあなたが決めることじゃないでしょう？

②みねり・登が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ●　花巻さんは朝食の後片付けと掃除とゴミ出しをして、家を出ました。徳間書

店に行くのは、昨日に続いて二回目。宮守さんは驚いてましたが、花巻さんはすぐに説得を開始しました。

八月六日朝、徳丸書店。みねり・登・弓奈がやってくる。みねりはバッグを持っている。

誠二郎は去る。

みねり 宮守さん、お願いします。ほんの五分でいいですから。

弓奈 どうして私が花巻さんに説得されなきゃいけないんですか？花巻さんは何の関係もないのに。

登 それはそうだけど、僕の言葉が伝えられるのは、花巻さんしかいないんだ。（弓奈に）あなたの言い分はよくわかる。自分がでしゃばりだつてこともし

みねり っかり自覚してる。でも、これは小山田さんの遺志なの。あ、この場合の「遺志」は「遺言」の「遺」に「志」つて書いて「遺志」ね。

弓奈 小山田さんがあなたに遺言したんですか？大して親しくもないのに。

みねり でも、嘘じゃない。小山田さんはこう言つたの。「僕も優に幸せになつてほしいんです。たつた一人の弟ですから」。「自分の小説より大事つてこと？」。

あ、今のは私のセリフね。

登 いいから続きを。

みねり （宮守に）「宮守さんは本当にいい子です。優に足りないものを全部持つてる。二人の結婚式を見届けるまでは、僕はあの世には行きませんよ」。そう

言いながら、行っちゃったけどね。

宮守 あ、小説つて何のことですか？

みねり・登 え？

宮守 今、言いましたよね？「自分の小説より大事」つて。

登 （みねりに）まずい。何とかして誤魔化してください。

みねり （弓奈に）そんなの決まつてるじゃない。今、自分が担当してる作家さんの

原稿のことよ。

宮守 本当ですか？小山田さんは自分でも小説を書いてるんじゃないですか？  
みねり さあ。私は聞いてないですけど。

麻衣子・誠二郎がやってくる。

麻衣子 宮守さん、平倉さんがあなたに聞きたいことがあるって言うてるんだけど。  
弓奈 あ、平倉先生、お久しぶりです。

誠二郎 何言ってるんだ。小山田くんの葬儀で会ったじゃないか。（みねりを見て）あ。  
みねり 嘘。平倉くん？

誠二郎 花巻さん、なぜここに？

みねり 私はちよっと、宮守さんに用事があつて。平倉くんは？

誠二郎 僕はまあ、仕事って言うか。

みねり そうか。平倉くん、今、作家なんだよね？てことは、この会社から本を？

誠二郎 うん。デビュー作からずっとお世話になってる。

麻衣子 ひよっとして、お友達？

誠二郎 ええ、そうです。役者をやってた頃の。

弓奈 え？平倉先生、役者だったんですか？

麻衣子 宮守さん、あなたも編集者なら、お付き合いのある作家さんのプロフィールぐらい頭に入れておきなさい。平倉さんは高校時代に演劇を始めて、大学を卒業した後、劇団に入ったの。演劇集団カラルソックス。

誠二郎 （弓奈に）今年で創立四十周年です。

麻衣子 （弓奈に）の、ラブストーリー、時代劇、おもしろそうなものには何でも手を出す、節操のない劇団よ。まあ、私は一度も見たことないけど。

弓奈 (誠二郎に)じゃ、プロの役者だったんですか？

誠二郎 まあ、一応。でも、才能がないことに気付いて、作家に転向したんだ。

弓奈 花巻さんは？やっぱり、役者だったんですか？

みねり ええ、まあ、でも、もう十二年も前の話ですから。

誠二郎 花巻さん、先に仕事の話を済ませるから、ちよつと待っててくれる？

みねり いいけど。(登を見る)

登 仕方ありません。

誠二郎 (弓奈に)実は先週、小山田くんに次の新作の資料集めを頼んだんだ。それがどうなったか知りたいんだけど。

弓奈 さあ、その話は何も聞いてません。小山田さんは亡くなる三日前から休んたし。

誠二郎 休んでた？病気か何かで？

麻衣子 本人から電話があつて、「熱が出たので、念のために休みます」って。でも、変ね。彼の家は西葛西でしょう？熱のある人がなぜ調布に行ったのかしら。そう言えばそうですね。

弓奈 (麻衣子に)目的は資料集めだったのかもしれませんが。だとしたら、彼の死は僕にも責任があつたことに。

麻衣子 いやいや、その判断は早計じゃないですか？

弓奈 (誠二郎に)小山田さんの机にあつたもの、調べてみましょうか？  
誠二郎 お願います。

③みねり・登・弓奈・麻衣子が去る。

誠二郎 ●

というわけで、ようやく僕が登場しました。僕は花巻さんを誘って、目黒駅前のコーヒーショップに行きました。もちろん、この時点では、小山田くん  
の存在には全く気付いてませんでした。

八月六日昼、コーヒーショップ。みねり・登がやってくる。みねりはカップを二つ持ってきて、一つを誠二郎に渡す。

誠二郎 あれから十二年も経つんだね。

みねり あつという間だったね。平倉くんの本、読んでもよ、全部。

誠二郎 全部？小説だけじゃなくて、エッセイ集も？対談本も？

みねり だって、おもしろいんだもの。何を読んでも、平倉くんらしいなと思って。

あ、もちろん、作家としても凄い才能だと思う。

誠二郎 取って付けたような言い方をして。でも、役者よりは向いてたんだと思う。

みねり 小山田さんは平倉くんの担当編集者だったんだね。

誠二郎 そうだよ。デビューしてすぐだから、もう十年以上になる。

みねり そんなこと、一言も言っただけだった。（登を見る）

登 聞かれませんでしたからね。

誠二郎 花巻さんは小山田くんとうやうて知り合ったの？

みねり え？知り合ったきっかけ？

登 さあ、何て答えます？

みねり （誠二郎に）実は最近、マッチングアプリを始めてね。

登 ちよつと待って！そんなことを言ったら、僕までマッチングアプリをやっ

てたことになるじゃないですか！

みねり (誠二郎に)でも、実際に会ったのは一回だけ。

誠二郎 それってもしかして。

みねり うん。事故があった日。

誠二郎 そうか。小山田くんはのために調布に。

みねり 小山田さんには本当に感謝してる。ちょっとしか話してないけど、いい人だと思う。

登 全然心が籠もってませんよ。

誠二郎 (みねりに)僕も同感だよ。でも、花巻さんがマッチングアプリをやってる  
とはな。ということは、今も独身？

みねり いろいろ忙しくて、出会いがなくて。平倉くんは？

誠二郎 一度、結婚直前まで行ったんだけどね。「やっぱりあなたとは住む世界が違う」って言われて。

みねり またそれか。世界が違うからおもしろいのに。

誠二郎 役者はもうやらないの？

みねり え？今更無理だよ。私の歳、知ってるでしょ？アラフォーだよ。

誠二郎 でも、花巻さんは僕と違って、才能があった。辞めるって聞いた時、もったいないと思ったんだ。

みねり あれは仕方なかったの。

誠二郎 だとしても、君にその気があるなら、復帰できるんじゃないかな、役者に。

みねり・登が去る。

①誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 十二年前の八月、僕と花巻さんは同じ舞台に立っていました。池袋のサンシヤイン劇場。芝居の評判は上々で、日を追うことにお客さんの数が増えていった。そして、いよいよ迎えた千秋楽の朝。

十二年前の八月六日朝、敏行の家。みねり・上郷あきのがやってくる。

みねり お姉ちゃん、頭痛はどう？

あきの 八時間寝たら、大分良くなった。これなら、お芝居、見に行けると思う。でも、まだ痛むんだ。私は無理してほしくないな。

あきの ただの頭痛で、みねりの晴れ姿を見逃すわけには行かない。

みねり オーバーなこと言わないでよ。別に主役でもないし。

あきの でも、主役の相手役でしょう？『デビルマン』なら「牧村美樹」、『マジン

ガー』なら「弓さやか」。

みねり どっちも知らない。

あきの とにかく、たったの五年でヒロインなんて、大出世じゃない。

みねり その分、いっぱいダメ出しされてるけどね。

あきの お父さんとお母さんにも見せたかったね。

みねり うん。でも、後でDVDを送る。

あきの みねりの劇団で、長野には行かないの？そうすれば、二人にナマで見てもらえるのに。

みねり 地方公演は大阪か神戸だけだね。たまに名古屋とか札幌には行くけど。

あきの じゃ、やっぱり東京に出てきてもらうしかないんだ。

みねり もし主役をやる日が来たら、その時は招待しようと思ってる。

あきの そうなの？じゃ、みねりにはもともとと頑張ってもらわないと。

みねり わかってる。

あきの 差し入れはまたゴディバのチョコでいい？

みねり ありがとう、お姉ちゃん。

あきの でも、もしお芝居がつまらなかったら、そのまま持って帰って、龍平と穂香に食べさせるからね。

## ② みねり・あきのが去る。

誠二郎 ● 花巻さんが劇場に到着したのが午前九時。ストレッチをして、ダンスの復習

をして、そろそろ舞台衣装に着替えようかと思っていたところへ、突然電話がかかってきました。

池袋サンシャイン劇場の楽屋。みねりがやってくる。携帯電話を持っている。別の場所に、敏行がやってくる。携帯電話を持っている。



みねり お義兄さん、どうかした？

敏行 みねりちゃん、落ち着いて聞いてくれ。あきのが調布駅で倒れて、病院に運ばれた。

みねり お姉ちゃんが？

敏行 俺は今、会社だけど、すぐに病院に駆け付ける。調布駅の近くの南山病院だ。お姉ちゃんの具合は聞いた？

敏行 意識不明の重体とだけ言われた。それ以上はわからない。

みねり お姉ちゃん、昨夜、頭が痛いって言って。今朝もまだ少し痛いって。

敏行 俺は何も聞いてない。頭の病気だとすると、脳梗塞か、クモ膜下出血か。

みねり そんな。お姉ちゃん、まだ若いのに。

敏行 みねりちゃん、これから本番だよな？

みねり うん。一時間後に開演。

敏行 じゃ、すぐには来られないよな？

みねり ごめん。今から代役を立てるわけにも行かないから、私がやらないと。

敏行 そうだよな。じゃ、芝居が終わったら、俺に電話してくれ。

みねり お義兄さん、お姉ちゃんをお願い。

敏行 わかった。

### ③ 敏行が去る。

誠二郎 ● 僕は何も気付きませんでした。花巻さんの演技は昨日までより力が入っていたけど、それは千秋楽だからだと思っていました。ところが、クライマックスのシーンで。

サンシャイン劇場の舞台。みねり・タケチ・オオツ・クサカベがやってくる。誠二郎は去る。

タケチ (みねりに) 先生、学校を辞めるって本当ですか？

みねり 誰に聞いたの、そんなこと。

タケチ 誰だっていいじゃないですか。問題は先生が辞めるか辞めないかです。

クサカベ (みねりに) みんなに言いにくいなら、部長の私だけに言ってください。

みねり 別に隠していたわけじゃないのよ。私は今月いっぱいこの学校を辞めます。

タケチ よその学校に移るんですか？

みねり そうじゃなくて、先生の仕事そのものを辞めるの。

オオツ それじゃ、サルマル先生が言ってたのは本当の事なんですね？

タケチ バカ！

みねり (オオツに) サルマル先生が何て言ったの？

オオツ はるか先生と結婚するって。

クサカベ (みねりに) 私たちが「絶対に信じられない」って言ったら、「嘘だと思うなら本人に聞いてみる」って。

みねり どうして嘘だと思ったの？

クサカベ だって、先生が好きなのは、ニュース・プラネットの柿本光介みたいな人なんじゃない？

タケチ 柿本光介とサルマル先生じゃ、全然タイプが違うじゃないですか。

みねり いくら好きだって、出会わなければ結婚できないでしょう？

オオツ そんなのわかりませんよ。

クサカベ 先生、好きなら最後まで諦めちゃダメですよ。

みねり サルマル先生だって、とっても素敵な人じゃない。

タケチ 本当にそう思ってるすか？

みねり 思ってるよ。

オオツ 絶対に後悔しませんか？

みねり しない、しない。

クサカベ 誰かがどこかで、先生のことを待ってると思わないんですか？

誠二郎 ヤマノウエが飛び出す。

誠二郎 はるか！

ヤマノウエ 柿本さん！話しかけちゃダメだって言ったでしょう！

タケチ ニュース・プラネットの柿本光介？

ヤマノウエ (柿本に) もう時間です。行きましょう。

クサカベ 柿本光介が「はるか！」だって。

オオツ 先生、知り合いなの？

みねり まさか。

誠二郎 はるか。

ヤマノウエ 柿本さん、法律違反ですよ。(柿本の腕を掴む)

誠二郎 (ヤマノウエを突き飛ばしてみねりに) 春山はるかさんですね？

みねり ええ。

誠二郎 はじめまして、柿本光介です。

ヤマノウエ さあ、もういいでしょう。

誠二郎 （みねりに）好きでした。会うのは今日が初めてだけど、ずっとずっと好きでした。

ヤミノウエ 柿本さん！

誠二郎 （みねりに）僕はただ、あなたに出会いたくて。

ヤミノウエ さあ！

ヤミノウエが誠二郎の腕を引っ張り、二人が走り出す。が、途中で立ち止まる。

誠二郎 （みねりに）今、何か言いましたか？

みねり ……。

誠二郎 言いましたか？

みねり ……。

誠二郎 言いましたよね？

クサカベ 言いました。小さい声で、「私のこと、知ってるんですか？」って。ねえ、

先生？

みねり ……。

誠二郎 「秋山の黄葉を茂み迷ひぬる

ヤミノウエが誠二郎の腕を引っ張り、走り去る。

クサカベ 先生。

④みねりが走り去る。後を追って、タケチ・オオツ・クサカベが走り去る。誠二郎がやつ

てくる。

誠二郎 ● 花巻さんがセリフを忘れるのを見たのは、これが初めて。本人にとっても、大シヨックだったと思います。芝居が終わると、花巻さんは大急ぎで荷物をまとめて、楽屋を出ました。ところが。

サンシャイン劇場の楽屋。成島雄太：みねりがやってくる。みねりはバッグを持っている。

成島 待てよ、花巻！あんなひどいミスをしておいて、黙って帰るつもりか？

みねり 申し訳ありませんでした。（頭を下げる）

成島 俺だけじゃなくて、全員に謝れよ。おまえのせいで、千秋楽がぶち壊しになったんだからな。

みねり 成島さん、私、ちよつと急用があつて。

成島 何だよ、急用つて。謝罪より大事な用事があるのかよ。

みねり すみません。

成島 だから、セリフが抜けたんじゃないか？おまえには芝居より大事なものがあつた。だから、一〇〇パーセント芝居に集中してなかつた。そんなやつに舞台に立つ資格はない。そう思わないか？

みねり 思います。

成島 何？

みねり 今日のミスでよくわかりました。私には舞台に立つ資格がありません。もう二度と舞台には立ちません。

成島 おまえ、そんなこと言っちゃっていいのか？

みねり 失礼します。(歩き出す)

成島 おい、花巻！

⑤みねりが去る。

誠二郎 ● 花巻さんが病院に到着した時、お姉さんは既に息を引き取っていました。三十九歳の早すぎる死でした。花巻さんは葬儀の翌日、劇団の事務所に行つて、退団願を出しました。

四日後の昼、中野区中央にある劇団事務所。みねりがやってくる。

誠二郎 花巻さん、ちよつと待って。

みねり 何？

誠二郎 君に聞きたいことがあるんだ。制作の仲村さんが言つてたんだけど、君のお

姉さん、千秋楽のチケット取つてたのに、来なかつたんだよね？何かあったの？

みねり ……。

誠二郎 ごめん。いきなりこんなこと聞かれても困るよね。でも、君は千秋楽の後、

急いで帰つたじゃないか。それで。

みねり 亡くなったの。あの日に。

誠二郎 え？

みねり 私たち、二人姉妹で、姉には本当にお世話になつて。高校を卒業して、東

京に出てきた時も、すぐに姉の家に転がり込んで、居候みたいにさせてもら

つて。おかげで、好きただけ芝居が出来た。でも、これからは違う。姉には旦那さんと、小学生の子供が二人いるから、誰かが家の事、やらなきゃいけないくて。

誠二郎

それは、役者を続けながらも出来るんじゃないの？

みねり

あの時、平倉くんが退場しようとした時、いつもだったら、「あ、柿本くんが行っちゃう」って思うのに、なぜか「お姉ちゃんが行っちゃう」って思ってた。それでもう、泣くのを堪えるので精一杯で。

誠二郎

そうだったのか。

みねり

成島さんの言う通りだよ。私には芝居より大事なものがあつた。だから、辞めるしかないんだ。

みねりが去る。

## ① 誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 花巻さんは僕と別れて、中野のジムに行きました。それから、調布の京王ストアで買い物をして、多摩川へ。川原へ下りる階段に座って、流れを見つめました。

八月六日夕、多摩川の川原。みねりがやってくる。バッグと買い物袋を持っている。階段に座る。登がやってくる。誠二郎は去る。

登 どうしたんですか？元氣ないですね。

みねり ……。

登 おなか空いてないですか？お昼、食べてませんよね？

みねり 小山田さんはおなか空かないの？

登 僕、おなか、ないですから。

みねり そうだったね。

登 本当は辞めたくなかったんでしょ？役者。

みねり ……。

登 だから、ダンスと発声練習を続けてたんでしょ？いつでも復帰できるよう



に。

それは違う。ダンスは美容と健康のため。発声練習はジムで教えてる時、ハッキリクッキリしゃべるため。

登 インストラクターがそこまでしますか？

みねり 本当はそれだけじゃない。私は大きな声を出すのが好きなの。家のこととか、仕事のこととか、うまく行かないことがあっても、ここで外郎売をやることスツキりする。ダンスもそう。踊ってる間は、イヤな事を忘れられる。

登 イヤな事って？

みねり それはいろいろ。

登 でも、一番は？自分のやりたいことが出来ないってことじゃないですか？

みねり うるさいなあ。小山田さんの言いたいことはわかるけど、それは無理なの。

お義兄さんは残業と出張が多いし、龍平くんは家から出られないし、穂香ちゃんは受験だし。家のことが出来るのは、私だけなの。

登 だからって、あなたが全部をしい込むことはない。みんなで分担すればいいじゃないですか。

みねり どうやって？あの三人に食事が作れる？洗濯が出来る？

登 それはあなたが教えれば。

みねり 無理！絶対無理！

登 あなたは十二年もお姉さんの代わりを務めた。恩返しはもう十分果たしたと思いますよ。

みねり それでも無理。

みねりが去る。後を追って、登が去る。

② 誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 花巻さんは家に帰ると、いつも通りに家事をこなしました。いつも通りに、夜の七時に夕食が完成。いつも通りに食卓は無人。予想はしてたけど、やっぱり気持ちが沈みました。

八月六日夜、敏行の家。みねり・登がやってくる。誠二郎は去る。

みねり (スマホを操作して) あ、二人からラインが来た。

別の場所に、穂香・敏行が現れる。

穂香 みねりさん、ごめん。今、友達とカラオケに来てます。ご飯は明日の朝、いただきます。

敏行 みねりちゃん、ごめん。今、同僚とビアホール。帰宅は午前零時の予定。

穂香・敏行が去る。

登 カラオケだ？ビアホールだ？いい加減にしろよ、二人とも！

みねり たまたま同時に気晴らしがしたくなったんじゃない？出来れば、もう少し早く連絡してほしかったけど。

登 あなたはいつ気晴らしをするんです。

みねり 家事に休日はないの。日本のお母さんはみんなそう。

登 そんなの絶対間違ってる！日本のお母さんは叛乱を起こすべきだ！

みねり 穂香ちゃんはカラオケか。体調、元に戻ったのかな。無理しないといいけど。

登 何言ってるんですか。とくに治ってたんですよ。心配してやる必要なんかないんだ。

みねり 小山田さん、興奮しすぎ。

登 えーえー、確かに僕は今、興奮してます。でも、その原因は敏行さんや穂香ちゃんじゃない。あなただ。

みねり 私？

登 花巻さん、あなたは間違ってる。今すぐ叛乱を起こしなさい！

みねり 叛乱で、そんなオーバーな。

龍平がやってくる。

龍平 今、叛乱で言った？

みねり うん、そう。即興演技をしてたら、相手の人が「叛乱を起こしなさい」って。

龍平 小山田っていう人？

みねり そう。私、名前を言った？

登 言いましたよ。「小山田さん、興奮しすぎ」って。

龍平 (みねりに) その人、どういう設定？

みねり そんなこと聞いて、どうするの？

龍平 みねりさんのセリフを聞いて、推理したんだ。だから、当たってるかどうか、知りたくて。

みねり 試しに言ってみて。

龍平 その人は男の人で、みねりさんよりちよつと年下で、独身で、まじめで、み

ねりさんのことが好きで。

登 ブー！はずれ！

龍平 (みねりに)でも、叛乱ていうのがよくわからない。

みねり 私のが好きな小山田さんはね、

登 好きじゃない！

みねり 黙ってて。(龍平に)小山田さんはこう言ったの。この家の家事を私一人で

やるのは間違つてゐる。みんなで分担するべきだつて。

龍平 それが叛乱？

みねり 私も自分が一番やりたいことをやるべきだつて。でも、私には今一つ確信が

持てないんだよね。やりたいって気持ちと同時に、出来るわけないって気持ち

ちもあつて。

龍平 僕と同じだ。

みねり 同じつて??

龍平 家から出て好きな所へ行きたいって気持ちと、出来るわけないって気持ちがあ

る。

登 僕は答えは明らかだと思うけどね。

龍平 (みねりに)僕はともかく、みねりさんの答えは明らかだと思う。だつて、

すぐに実行できるんだから。

みねり そうかな。

龍平 やりたいことがあつて、それが今すぐ実行できるなら、やらない手はない。

登 たまにはいいこと言うじゃないか。

みねり じゃ、龍平くんも家事をやってくれる？もちろん、お義兄さんと穂香ちゃん

にもやってもらうから、四分の一でいい。四日に一度、食事を作って、洗濯をして、掃除をして、買い物をして。

登 (龍平に)やるよな？

龍平 ごめん、すぐには無理。(出ていこうとする)

登 おい、逃げるのか？

みねり (龍平に)ご飯はどうする？

龍平 後にする。ごめん。

龍平が去る。

登 龍平！それがおまえのトゥルースか！

みねり 小山田さん、もう何言ってるか、わからない。

登 花巻さんは彼を許すんですか？「やりたいことがあって、それが今すぐ実行

できるなら、やらない手はない」。こんな偉そうなことを言っておいて、自分はやらないやつを。

みねり だって、無理なものは無理なもの。

登 やっぱりあなたは叛乱を起こすべきだ。今すぐこの家を出るんですよ。

みねり 家を出る？何もそこまでしなくても。

登 あなたがここにいたら、どうせすぐに元に戻る。彼らは甘え、あなたは甘やかす。

みねり でも、私はこの歳になるまで、一人暮らしをしたことないんだよ。

登 あなたなら大丈夫です。

みねり 大丈夫じゃない。

登 やると言ってください。

みねり 言えない。言えるわけがない。

登 ああ、限界だ。もう我慢の限界だ。うおーっ！

みねり 小山田さん、大丈夫？

登 花巻さん、お願いがあります。

みねり 何よ、改まって。

登 「やりたいことがあって、それを今すぐ実行できるなら、やらない手はない」。

これは間違いなく真実です。今から僕がそれをしてみせます。

みねり どうやって？

登 だから、やるんですよ。やりたいことを。

みねり それって、小説を完成させること？

登 昨夜は優のことがあって、あんまり先に進まなかったけど、もうグダグダ悩

むのは止めた。絶対に今晚中に完成させます。僕のノートパソコンを用意し

てください。

みねり わかった。でも、何もそんなに急がなくても。

登 いいえ、やります。その代わり、約束してください。僕が小説を完成させた

ら、あなたもやりたいことをやるって。

みねり え？それはちよっと。

登 四の五の言わずに、準備！

みねり はい！

①誠二郎がやってくる。

誠二郎● 花巻さんは口述筆記を開始しました。その後、敏行さんと穂香ちゃんが帰ってきましたが、「お帰りなさい」と言うだけで、ノートパソコンを打ち続けました。やがて、外がうっすらと明るくなり始めた頃。

八月七日朝、敏行の家。みねりがノートパソコンを打っている。横に登が立っている。

登 「かすみちゃん、さよなら！さよなら！さよなら！」。

みねり (ノートパソコンを打ちながら)「かすみちゃん、さよなら！さよなら！さよなら！」。で、次は？

登 終わりです。

みねり (ノートパソコンを打ちながら)「終わりです」。え？

登 それは打たなくていいんです。わかりませんか？終わっただけですよ。僕の最後の小説が完成したんです。やった！俺はやり遂げたぞ！

みねり おめでとう、小山田さん！でも、死ぬほど疲れた。

登 (ノートパソコンを見て)午前五時五五分。約九時間、ぶっ通しで書きましたからね。長時間のお付き合い、ありがとうございました。

みねり 徹夜なんて何年振りだろう。横になったら、三秒で眠れそう。じゃ、私は寝

るね。

登 何言ってるんですか。その前にやることあるでしょう？

みねり え？

登 僕は約束を果たした。今度はあなたの番です。

みねり でも、あれはあなたが勝手に言ったことで。

みねり・登が話し合いを始める。

誠二郎● 小山田くんの勢いは止まりませんでした。花巻さんを説得して、やりたいこ

とをやると約束させました。三十分後、花巻さんは家族三人を起こして、話があると言いました。

敏行・穂香がやってくる。誠二郎は去る。

穂香 みねりさん、今朝はご飯は作ってないの？

敏行 (みねりに) 俺は大丈夫だよ。コンビニでサンドイッチを買うから。

みねり 悪いけど、そうしてくれる？

敏行 で、話つていうのは？

みねり それは龍平くんが起きてきてから。

龍平がやってくる。



登 来た、来た。(みねりに)全員揃いましたよ。

みねり お義兄さん、龍平くん、穂香ちゃん、朝からごめんね。実はみんなに大事な話があるんだ。

登 さあ、思い切って、言っちゃいましょう。

みねり (三人に)突然の話で驚くかもしれないけど、驚いてるのは私も同じで、まさかこんなことになるとは思っていませんでした。

登 前置きはいから、さあ。

みねり (三人に)私は今日から一週間以内に、この家を出ます。  
三人 は？

穂香 (みねりに)よそへ引越すってこと？どこへ？

敏行 (みねりに)まさか、結婚か？

穂香 えーっ？みねりさん、そんな人がいたの？名前は？どんな仕事してる人？  
みねり 誤解しないで。私は結婚も同棲もしない。この家を出て、一人暮らしを始めるの。

敏行 何のために。

みねり 役者に復帰するため。わかってる！みんな、今、「何で今更？」って思ったよね？それは私も同じ。こうして話をしてる今も、まだ迷いがある。

登 でも、約束ですよ。

みねり (三人に)でも、約束したの。ある人と。自分の一番やりたいことをやるって。昨夜、龍平くんも言ったよね？「やりたいことがあって、それが今すぐ実行できるなら、やらない手はない」って。

龍平 うん。

みねり 賛成してくれる？

龍平　　するよ。もちろん。

穂香　　（みねりに）私も賛成。私に手伝えることがあったら、何でもする。お父さんは？

敏行　　俺も同じだ。（みねりに）あきのが死んでから、みねりちゃんはずっとこの家を支えてくれた。十二年もだ。これからは自分のことを優先してほしい。ありがとう、お義兄さん、ありがとう、みんな。

登　　さあ、問題はここからです。

みねり　　（三人に）で、みんなに質問があるんだけど、私がこの家からいなくなったら、家事はどうする？

三人　　あ。

みねり　　三人でやるしかないよね？出来る？

穂香　　えー？私は無理。起きてる時間は全部、勉強に当てないと。

敏行　　俺も出張や残業を断るわけには行かないしな。

龍平　　でも、やるしかないんだよ。僕ら三人で。

敏行　　偉そうな口を叩くな。引きこもりのおまえに何が出来る。

龍平　　わからないよ。でも、僕には言えないよ。「みのりさん、僕たち、家事は無理だから、復帰は諦めて」なんて。

登　　龍平、よく言った！

敏行　　（龍平に）そうだな。

穂香　　話し合おう。これから三人でどうするか。

② 敏行・龍平・穂香が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 三人はラインで家族会議をしようと約束して、解散しました。花巻さんは小

山田くんの小説を徳丸書店の岩根さんにメールで送付。そして、徳丸書店に向かいました。

②八月七日朝、徳丸書店。麻衣子がやってくる。誠二郎は去る。

みねり 岩根さん、小山田さんの小説は読んでいただけましたか？

麻衣子 最初の方だけ。もつとじっくり読もうと思って、今、宮守さんにプリントアウトしてもらってます。でも、まさか小山田くんが小説を書いていたなんて。

私たちの前ではそんなこと、一言も言ってなかったのに。

登 恥ずかしいからですよ。

麻衣子 (みねりに) あれは本当に小山田くんが書いたものなんですか？

みねり 間違いありません。小山田さんは亡くなる前に言ってたんです。高校生の頃から作家になりたかったって。

麻衣子 そんな秘密を打ち明けられていたなんて。やっぱりあなたは。

みねり・登 違います！

麻衣子 そんな大声を出さなくても。

みねり それで、一昨日、小山田さんのお宅へ行って、彼のノート・パソコンを譲っていただいて。

麻衣子 ああ、あなたが持ってたやつですね？

みねり そうです。で、中身を調べてみたら、あの小説が。

弓奈がやってくる。紙の束を持っている。

弓奈 お待たせしました。(麻衣子に紙の束を差し出す)

麻衣子 (受け取って) ありがとう。長さはどれくらい？

弓奈 四〇〇字詰原稿用紙に換算すると、約六〇〇枚です。

麻衣子 力作ね。東野圭吾さんの『容疑者×の献身』がちょうどそれくらいだったと思う。

登 あんな偉い人と比べないでください！

麻衣子 (みねりに) で、これをどうしろと？

みねり まずは読んでください。それでもし本にする価値があると思ったら、徳丸書店で出版してください。

麻衣子 残念ですが、それは不可能です。

みねり なぜですか？

麻衣子 作家さんが書いた小説をそのまま出版するということは、常識的にありえないからです。どんなに有名な作家さんでも、編集者が読んで、気付いた点をお伝えして、書き直しをお願いしています。でも、小山田くんにはそれが出来ない。

登 死んでまずからね。

麻衣子 (みねりに) そんな不完全な作品を、我が社から出版するわけには行きません。

みねり 書き直しは私がやります。

麻衣子 あなたが？

みねり (登に) やれるよね？

弓奈 さあ、私に聞かれても。

登 (みねりに) やりますよ。岩根さんが出版にゴーサインを出すまで。

麻衣子 (みねりに) 失礼ですけど、あなたも作家志望？

みねり いいえ。でも、私は小山田さんの友達です。小山田さんの気持ちは誰よりも

わかる。私には、小山田さんの声が今も耳元で聞こえるんです。

麻衣子 また、オーバーなことを。

登 事実なんですよ、これが。

みねり (麻衣子に) とにかく一度読んでください。書き直しについてはその後で。

麻衣子 わかりました。これは小山田くんがこの世に遺した形見みたいなものですか

らね。心して読ませてもらいます。

みねり ありがとうございます。

登 よしっ！

弓奈 (麻衣子に) 私も後で読んでいいですか？

麻衣子 もちろんよ。二人でこの原稿、真っ赤にしてやりましょう。

弓奈 楽しみです。小山田さんが作った物語が読めるなんて。

みねり 宮守さん、良かったら、また一緒に食事に行きませんか？

弓奈 まだお昼まで時間がありますけど。

麻衣子 キリがいいから、今日は早めにしましょう。小山田くんがよく行ってたとん

かつ屋さんはどう？

みねり 出来れば、また二人だけで。

麻衣子 あ、やっぱりお呼びでない？じゃ、私は早速これを読みます。

麻衣子が去る。誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● 花巻さんは宮守さんに「ちよつと遠くの店に行きましよう」と言いました。

小山田くんが「どこへ行くつもりですか?」と聞くと、ニッコリ笑って、「こつなつたら、やれることは全部やつちやおう!」。

③ 八月七日昼、登の家。みねり・登・弓奈・優がやってくる。優はシェフの服装。誠二郎は去る。

優 (みねりに) 何々?今日は食事に来たんじゃないの?

みねり 食事はします。でも、その前に話したいことがあつて。

優 えーっ?今、ランチタイムで忙しいんだけどな。

みねり せつかく宮守さんにも来てもらつたんだから、五分だけ時間をください。

優 弓奈が頼んだの?

弓奈 違つ。私も強引に連れてこられたの。「ちよつと遠く」が西葛西だなんて、思つてもいなかった。

登 岩根さんには言わねえ方がいいね。ごめん、親父ギャグだった。

みねり (弓奈に) いいから、私の話を聞いて。あなたたちには話してなかつたけど、私は小山田さんから聞いてたの。あなたたちの結婚のこと。まるで自分のことのように喜んでた。

優 知つてますよ。俺たちが揉めるたびに仲裁してくれたし。

みねり じゃ、もしここに小山田さんがいて、あなたたちが結婚式を延期しようとしてるつて聞いたたら、何て言うと思う?

優 (弓奈に) どう?

弓奈 (みねりに) 私の気持ちを知つたら、賛成してくれるんじゃないかと。

登　　しないよ、賛成なんか！

みねり　（弓奈に）しないよ、賛成なんか！

弓奈　　え？

みねり　小山田さんなら、そう言うと思う。それから。

優　　それから？

みねり　周囲を伺って）それから？

登　　（弓奈に）宮守さんがためらう気持ちはわかる。でも、それはよくあるマリ

ツジブルーだと思う。

みねり　宮守さんがためらう気持ちはわかる。でも、それはよくあるマリツジブルー

だと思う。

弓奈　　そんな使い古された言葉で片付けなください。私だってよく考えたんで

す。

みねり　ダメ。それがダメなのよ。

登　　僕はそんなこと言ってますよ。

弓奈　　（みねりに）ダメって何が？

みねり　だから、考えること。

澄子がやってくる。シェフの服装をしている。

澄子　　優、私一人じゃ手が足りないよ。厨房に戻りな。

みねり

すぐには済むから、ちょっと待って。いい、宮守さん？行動を起こす前に冷静に考える。これって、一見正しい気がするよね？私もずっとそうだった。でも、その時、実は私は冷静じゃなかった。気が小さいから、悪い方へ悪い

方へと考えが進んだ。で、結局、行動を起こさなかった。気付いた時にはアラフォーよ。

登 花巻さん、自虐になってますよ。

みねり

（弓奈に）この人と二人で生きていこう。そう思ったから結婚するって決めたんでしょう？ だったらその次にやるべきことは、ためらうことじゃない。実行すること。石にかじりついてでも実行するの。

優 俺は最初からそのつもりだったけど。

登 だったら、元カノと出かけるな！

みねり

宮守

（優に）元カノと出かけてもいい。でも、その時は宮守さんも連れていくの。え？ 私は。

みねり

住む世界が違う？ そんなの、生まれも育ちも違うんだから、当たり前じゃない。二つの世界を一つにしていく。それが結婚でもんでしょう？ まあ、そう言う私はいまだに独身だけどさ。

澄子

（拍手して）ブラボー！

優

ばあちゃん、まだいたのかよ。

澄子

いやあ、大した演説だ。登が生きてたら、きっと同じことを言ったよ。

みねり

（周囲を伺って）そう？

登 いいえ、あなたにはかないません。

優・澄子・弓奈が去る。



①誠二郎がやってくる。

誠二郎 ● その後、花巻さんは一階のイタリアンレストランでランチをご馳走になりました。で、電車に乗って、西へ。新宿駅で宮守さんと別れて、西新宿へ向かいました。

八月十日昼、誠二郎の家。みねり・登がやってくる。

みねり ごめんね、いきなり押しかけてきて。執筆中だったんじゃない？

誠二郎 いや、新作の参考になるかと思って、映画を見てた。それより、僕の住所、誰から聞いたの？小山田くん？

みねり そう。

登 (誠二郎に)すみません、勝手なことをして。その上、道案内までしちゃいました。

みねり (誠二郎に)今日、ここに来たのは、平倉くんに頼みたいことがあるからなんだ。

誠二郎 もしかして、役者に復帰する気になった？

みねり そうなの。私もあれからいろいろ考えて、復帰するなら今しかないと思って。

誠二郎

みねり

で、成島さんに伝えてほしいの。私が会いたって言うてるって。会見をセッティングしろって言うんだね？お安い御用だよ。あんな辞め方しちやったし、十二年も経っちゃったし、だから、断られるのは覚悟の上。それでも、会って、あの時のことを謝って、「もう一度やらせてください」って言うつもり。

誠二郎

みねり

成島さん、きつと喜ぶと思うよ。そうかな。

誠二郎

間違いないよ。花巻さん、今だって綺麗だし、体型も維持してるし、ダンスと発声練習も続けてるんだろう？すぐに舞台に立てるよ。

みねり

どうして知ってるの？ダンスと発声練習を続けてること。

誠二郎・登

え？

誠二郎

（みねりに）昨日会った時、言ってたじゃないか。

登

（みねりに）えーえー、確かに言っていました。

みねり

そうだったかな。

誠二郎

とにかく、君の気持ちはわかった。僕に出来ることは何だってするよ。君に復帰を勧めたのは僕なんだから。

みねり

ありがとう。平倉くんには本当に感謝してる。あと、小山田さんにも。

誠二郎

小山田くんにも何か言われたの？

みねり

うん。

誠二郎

何て？

みねり

平倉くん、驚かないで聞いてくれる？

登

まさか、話すんですか、僕のこと？

みねり

（誠二郎に）私には小山田さんの声が聞こえるの。三日前から。

登 何てバカなことを。信じてもらえるわけないのに。

みねり (誠二郎に) 幻聴だつて、思うでしょ? でも、違ふの。姿は見えないけど、

小山田さんは今もここにいます。本人は幽霊だつて言ってるけど。

誠二郎 花巻さん、それ、本気で言ってる?

登 ほら、やっぱり正気を疑われた。

みねり 「ほら、やっぱり正気を疑われた」って小山田さんが言った。

登 無駄ですよ。平倉さんが信じるわけない。

みねり 「無駄ですよ。平倉さんが信じるわけない」って小山田さんが言った。

登 いちいち報告しないでください。

みねり わかった、わかった。

誠二郎 会話も出来るの?

みねり この三日間、ずっと会話してきました。その中で、小山田さんが言ったの。「やりたいことがあつて、それを今すぐ実行できるなら、やらない手はない」

て。

登 最初に言ったのは、龍平くんですけどね。

みねり 今、その名前を出しても、わからないでしょう?

誠二郎 本当に会話してるように見える。

みねり 小山田さんはそれを証明して見せた。書きかけだった小説を完成させたの。

だから、私も役者に復帰しようって決心したの。

誠二郎 花巻さん、ちよつと待って。

みねり 何よ。やっぱり信じてくれないの?

誠二郎 それは無理だよ。僕には何も聞こえないんだから。

登 それが普通の反応ですよ。

誠二郎

(みねりに) 小山田くんは君の身代わりになって死んだ。君は彼の死に強い罪悪感を抱いてる。それが声になって聞こえるんだよ。

みねり

違う。そうじゃないの。

誠二郎

でも、彼の死については、僕にも責任があるんだ。

登

え？あなたも言っちゃうんですか？

みねり

(誠二郎に) どういうこと？

誠二郎

小山田くんは君の調査をしてたんだ。

みねり

調査？どうして？

誠二郎

成島さんから電話をもらったんだ。「花巻は今、どうしてる？」って。来年の公演のキャスティングをしてて、ヒロイン役が出来る女優が劇団内にいなくて、それで花巻さんのことを思い出したんだって。僕は何が何でも君にやつてほしいと思った。

みねり

だったら、すぐに連絡してくればよかったのに。

誠二郎

そうしたら、君は引き受けてくれた？

みねり

間違いないと思う。

誠二郎

僕にはそこまでの確信はなかったけど、相当慎重にやらないと難しいと思った。いきなり依頼するより、今の花巻さんの状況を調べた方がいいって。すると、たまたまその時、家に来ていた小山田くんが「僕が調べてみましょうか」って。

登

みねり

(みねりに) だって、興味があつたんですよ。あなたの話は平倉さんから何度も聞かされてんです。今でも忘れられない人だって。えーっ！

誠二郎

彼は会社を休んで、君の身边調査をしてくれた。事故の話聞いた時は、ビ

ツクリしたよ。

登 (みねりに) 僕はあなたを尾行してたんです。本当にごめんなさい。

みねり 尾行？

登 でも、そのおかげであなたを助けることが出来たわけですから。

みねり ということは、私のことは全部知ってたのね？お義兄さんの家で家事をして

ることも、ジムでインストラクターをしていることも、多摩川の川原で発声練習をしていることも。

登 すみませんでした。今まで黙ってた。

みねり つまり、全部、仕組まれてたってこと？あなたは私を役者に復帰させようとした。私はそれに乗せられただけだった。

誠二郎 花巻さん、落ち着いて。今、君の耳に聞こえてるのは、君が作り出した幻聴なんだ。

みねり バカ！何てバカなんだろう。

登 いくらでも罵ってください。悪いのは僕です。

みねり 違う。バカは私。調子に乗って、その気になった私！

②みねりが去る。後を追って、登が去る。

誠二郎 ● 花巻さんが出ていった後、僕は彼女が言ったことをもう一度思い出しました。

そして、ある言葉に引かかりました。「小山田さんはそれを証明して見せた。書きかけだった小説を完成させたの」。小山田くんが小説を？

八月七日夕、多摩川の川原。みねりがやってくる。階段に座る。登がやってくる。誠二

郎は去る。

登 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』は読みましたか？

みねり ……

登 ケンタウルスの星祭りの夜、カムパネルラは何人かの友達と小船に乗って、川に出た。その時、友達のザネリが川に落ちた。カムパネルラをすぐに川に飛び込んで、ザネリを助けた。が、彼自身は命を落としてしまう。

みねり ……

登 最初に読んだ時、思いましたよ。カムパネルラは可哀想だ。せつかくザネリを助けたのに、死んでしまうなんて。それに引き換え、ザネリは助けてもらったのに、何の恩返しもしてない。ザネリは狡いつて。でもね、ある時、気が付いたんです。カムパネルラから見ると、ちよつと違うかもしれないって。確かに彼は死んだかもしれない。でも、天国までの長い旅を、大好きなジョバンニと一緒に過ごすことが出来た。一人にはならなかった。

みねり で、結局、私はザネリなの？ジョバンニなの？

登 最初はザネリ、でも、今はジョバンニですよ。

みねり でも、あなたはカムパネルラじゃない。カムパネルラは尾行なんかしない。

登 そのことについては本当にお詫びします。アラフォーとは言え、独身の女性の後をつけ回すなんて、一歩間違えたらストーカーです。本当に申し訳ありませんでした。

みねり 「アラフォー」が余計。

登 すみません。それから、平倉さんのことも許してあげてください。あなたを調査しようって言い出したのは僕なんだから。

みねり　でも、彼も賛成したんだよね？

登　すべてはあなたを思つてのことです。平倉さんはあなたのことが好きなんですよ。

みねり　何それ？私はただのおばさんだよ。

登　そんなことはない。あなたはとても素敵な人です。この四日間で、平倉さんが長年思い続けてきた理由がよくわかった。

みねり　おだてても無駄。本当は自分の狙い通りになつて、「やったぜ」つて思つてゐるにせよ。

登　それは違います。

みねり　違わない。まんまとあなたに乘せられて、役者に復帰する氣になつた。本当にバカだよ。冷静に考えたら、無理に決まつてゐるのに。

登　それ、矛盾してませんか？

みねり　何よ、矛盾で。

登　あなたは宮守さんにこう言つたじゃないですか。「この人と二人で生きていこう。そう思つたから結婚するつて決めたんでしょう？だつたらその次にやるべきことは、ためらうことじゃない。実行すること」。

みねり　うわあ、そんな偉そうなこと、よく口に出来たな。

登　ええ、僕もちよつとそう思いました。でも、あなたは間違つてない。今は冷静に考える時じゃない。踏み出す時なんです。

みねり　でもなあ。

登　心配しないで。困つた時には、僕がアドバイスしますから。

みねり　え？あなた、これからもずっと私のそばにいるつもり？

登　いや、とりあえず、お迎えが来るまでは。

あきのがやつてくる。

あきの 来ましたよ。

みねり・登 え？

あきの 小山田登さんですよ？あなたは三日前に亡くなった。本来ならば、その瞬間にこの世を去るはずだった。死者がこの世に残ることは許されません。さあ、私と一緒に行きましょう。

みねり (周囲を伺って) 誰？

登 みねりさんにはこの人が見えないんですか？

みねり 小山田さんには見えるの？

登 ええ。この人にも僕が見えてるみたいです。(あきのに)もしかして、天使？  
あきの いいえ。私はあなたと同じ存在。

登 幽霊？

あきの 違います。魂です。あなたを迎えに行くように、天から遣わされたんです。つまり、天国からの使者ってことですよ？それならやつぱり天使だ。

あきの いいえ、私は人間の魂。元々は普通の人間です。あなたはみねりの命を救ってくれた。だから、私が遣わされたんです。

みねり 今、みねりって言った？

登 ええ、確かに。

みねり 嘘。嘘でしょう？

登 どうしました、みねりさん？

みねり まさか、まさか、お姉ちゃん？



あきの  
あのみねりがもうアラフォーか。

①誠二郎がやってくる。

誠二郎● 小山田くんはあきのさんと共に旅立っていきました。姿が見えないので、手を振ることも、見送るも出来ませんでした。花巻さんはしばらく多摩川の流れをボーッと眺めて、家に帰りました。

八月七日夜、敏行の家。みねり・敏行がやってくる。敏行はエプロンをして、本を持っている。誠二郎は去る。

みねり

お義兄さん、そのエプロンは何？

敏行

いや、龍平と穂香と話合って、今日の夕食の当番は俺ってことになって。

みねり

嘘。料理なんて、結婚してからずっとやってでしょう？

敏行

ああ。だから、今日は会社を定時で退社して、途中でこの本を買って。（本を差し出す）

みねり

（本を受け取って）「男のええ加減料理60歳からの超入門書」？

敏行

（本を取り返して）これなら、俺でも何とかなるんじゃないかと。

穂香がやってくる。買い物袋を持っている。

穂香 あ、みねりさん、お帰り。

みねり 穂香ちゃん、もしかして、買い物をしてきたの？

穂香 今日の買い物当番なんでね。

みねり 冷蔵庫は確認した？

穂香 もちろんしたよ。でも、お父さんがメニューを決めてくれないから、とりあ

えず、今ないものと、もうすぐなくなりそうなものを買ってきた。(敏行に)  
で、決まったの？

敏行 (本を差し出して) ゴーヤチャンプルーはどうだ？

穂香 ゴーヤがない。どうして思い付いた時にラインしないのよ。

龍平がやつてくる。洗濯物を持っている。

敏行 おお、もう乾いてたか？

みねり 龍平くんは洗濯当番？

穂香 お兄ちゃん洗濯専任。買い物に行けないし、ずっと家にいるから、雨が降  
った時にすぐに取り込めるでしょ？

龍平 (みねりに) 洗濯機があるから楽かと思ったけど、干したり取り込んだりが  
大変だね。

敏行 違うぞ、龍平。畳んだりアイロンがけしたりして、ダンスやクローゼットに  
仕舞うまでが洗濯なんだ。

穂香 お父さん、やったことないくせに。

龍平 (敏行に) アイロンも？

みねり　すぐに慣れるよ。頑張つて。

穂香　（振り返つて）あ、誰か来たみたい。私、見てくるね。

穂香が去る。

みねり　お義兄さん、私にも何かやらせてよ。まだしばらくはこの家にいるんだから。

敏行　じゃ、夕食の。

龍平　父さん、決めただろう？

敏行　違う違う。もちろん、夕食は俺が作る。でも、久しぶりだから、いろいろ間

違えるに決まつてる。だから、そばで見てて、注意してもらうんだ。

みねり　わかった。でも、明日からは私も何かの当番にして。

穂香・誠二郎がやつてくる。

穂香　みねりさん、お客様。

誠二郎　お邪魔します。

みねり　平倉くん、どうしたの、急に。

誠二郎　ごめんね。どうしても君と話がしたくて。

みねり　あ、みんな、紹介するね。この人は私の劇団時代の友達で、平倉誠二郎くん。

今は小説家で、結構有名なんだよ。

敏行　（穂香に）知ってるか？

穂香　私、小説は読まない。

龍平　右に同じ。

誠二郎

この反応はいつものことだけど、ちよつと寂しいです。

みねり

で、私に話って何？

誠二郎

昼間、家に来た時、君はこう言つたよね？「小山田さんはそれを証明して見せた。書きかけだった小説を完成させたの」って。

みねり

そうだったかな。

誠二郎

気になって、徳丸書店の岩根さんにメールしてみたら、今朝、君が来て、「小山田くんの小説を出版してくれ」って言つたって。で、「僕にも読ませてほしい」ってお願いしたら、すぐに送ってくれた。

みねり

じゃ、読んだの？

誠二郎

読んだよ、一気にラストまで。信じられないほどおもしろかった。あれって、小山田くんが書いたものに間違いないんだよね？

龍平

小山田、小山田、小山田！

穂香

何よ、いきなり大声を出して。

龍平

みねりさん、小山田さんて、実在するの？

敏行

龍平、おまえは横から口を出すな。

龍平

でも、僕は知ってるんだ。最近、みねりさんが一人でいる時、即興演技をするようになって、その時の相手の名前が小山田で。

穂香

お兄ちゃん、全然意味がわからない。

誠二郎

僕にはわかった。（みねりに）君がしていたのは即興演技じゃない。小山田くんと会話してたんだ。そうだろう？

みねり

実はそう。

敏行

誰なんだ、小山田って。

穂香

ちよつと待って。みねりさんの事故の時、亡くなったのが確か。

みねり

そう。その小山田さん。私には小山田さんの声が聞こえたの。

敏行

みねりちゃん、冗談だよな？

誠二郎

いや、事実です。そうでなければ、小山田くんが小説を書いていたことを、

花巻さんが知るはずがない。(みねりに)小山田くんに頼まれたんだろう？  
小説を完成させてほしいって。

みねり

そう。やっと信じてくれたね。

誠二郎

じゃ、小山田くんは今もここにいるの？

みねり

それがないの。ついさっき、あの世に行っちゃった。

誠二郎

なぜだ。大事な話があったのに。

登がやってくる。。

登

大事な話って？

みねり

その声は小山田さん？あの世に行ったんじゃなかったの？

登

あきのさんに頼んで、一分だけ、戻らせてもらったんですよ。

誠二郎

花巻さん、小山田くんが戻ってきたの？

みねり

うん。でも、ここにいられるのは一分だけだって。

誠二郎

わかった。小山田くん、君の小説、おもしろかった。ぜひ出版すべきだと思

った。でも、あのままってわけには行かない。いくつか直さなきゃいけない  
所がある。で、その書き直しなんだけど、僕にやらせてもらえないだろうか。

みねり

平倉くんが？

登

(誠二郎に)ひょっとして、岩根さんが条件を出したんですか？平倉さんが  
やるなら出版してもいいと。

みねり

(誠二郎に)ひょっとして、岩根さんが条件を出したんですか？平倉さんがやるなら出版してもいいと。

誠二郎

実はそうなんだ。でも、君と僕の共作にするって案は断った。作者はあくまでも君だ。どうだろう？僕が書き直しをしてもいいかい？

登

いいに決まってますよ。全部あなたにお任せします。

みねり

(誠二郎に)いいに決まってますよ。全部あなたにお任せします。

登

僕の本が出せるんですね。平倉さん、本当にありがとうございます。

みねり

(誠二郎に)僕の本が出せるんですね。平倉さん、本当にありがとうございます。小山田さん、あと十秒しかない！

登

みねりさん、ありがとうございます。どうか平倉さんとしあわ。

登が去る。

誠二郎

花巻さん、小山田くんは？

みねり

声が聞こえなくなつた。もう行っちゃったんだと思う。

誠二郎

彼は最後に何て言ったの？

みねり

さあ。途中までだったんで、よくわからない。

敏行

みねりちゃん、感動したよ。凄い演技だった。

穂香

お父さん、違う。今のは演技じゃなくて、たぶんリアル。

敏行

リアル？そんなことあるわけないだろう。亡くなった人の声が聞こえるなんて。

穂香

それは私も思うけど。

龍平

(みねりに)小山田さんはずっとみねりさんのそばにいたの？

みねり うん。大抵、私のナナメウシロに。

穂香 うわー、まるで背後霊みたい。

みねり 背後霊は見守るだけでしょ？でも、あの人はずっとしゃべってた。あなたたち

の悪口もいっぱい言ってた。

穂香 何て、何て？

みねり 私もさんざん嫌味を言われた。本当に腹が立った。でも、こうして聞こえな

くなると、何だかちよつと寂しい気がしてきた。変だよ。

誠二郎 役者に復帰するって決めたのも、小山田くんに励まされたからなんだろう？

みねり いけない。お礼を言うの、忘れてた。小山田さん、ありがとう！ありがとう！

②

誠二郎 ● こうして小山田くんはこの世を去りました。僕は花巻さんから詳しい話を聞

きました。この四日間に何かあったか。小山田くんは何をしたのか。そして、決心したのです。彼のことを小説にしようと。

八月十七日夜、誠二郎の家。優・澄子・麻衣子・弓奈がやってくる。

誠二郎 以上が、僕がこれから書く新作のあらすじです。

優 長かった！二時間近くかかりましたよ。

誠二郎 すみません。なるべく正確にと思ったんで。

優 ばあちゃん、起きてるか？

澄子 ああ、夕飯はサッポロ一番でいいよ。

優 (誠二郎に)すみません。もう一度最初から話してもらえますか？いや、冗



談ですよ。

麻衣子 話を元に戻しましょう。平倉さん。

誠二郎 (他の五人に) お聞きのように、今回の小説には皆さんが登場します。もちろん、皆さんの名前は変えますし、住所とか職業とか、個人情報に関することはすべて別のものにします。が、皆さんの知り合いが読んで、「これって〇

〇さんじゃない？」と気付く可能性がゼロとは言えません。

宮守 (他の五人に) 皆さんだって、「俺はこんなこと言っていない」とか「私はこ

んな人間じゃない」とか、文句を付けたくなるかもしれません。

穂香 お父さん、言いそう。

敏行 言わない。どうせ読まないからな。

麻衣子 そう言わずに読んでください。完成したら、お送りしますから。

龍平 僕、読みます。あ、(誠二郎に) ぜひ読ませてください。

誠二郎 ありがとう、龍平くん。(他の五人に) 僕は小山田くんのことを書きたい。

小山田くんが言ったこと、したことを残したい。作家になって、これほど強い衝動を感じたのは初めてです。どうか皆さんの許可をください。

みねり 題名はもう考えてあるの？

誠二郎 もちろん。僕が考えた題名は。

誠二郎がタイトルを口にする。他の七人が口々に意見を言い始める。

< 幕 >